

# よりよい自分をつくっていくために IV



静岡県教育委員会

## はじめに

### 「教師であり続ける」

「学びの実感」に焦点を当て、一人一人の子どもの「学力」や「成長」を支える授業づくりに取り組み始めて8年目を迎えます。各学校では、「どうしてこうなるのだろう」「なるほど、そういうことか」「もっと知りたい」など、仲間と関わりながら、学びを深める子どもたちの姿がたくさん見られます。

こうした学びを支えているのは、子どもたちにとって魅力ある授業を追求し続けている皆さんに他なりません。

一人一人の子どものよりよい成長に向けられる情熱や高い使命感は、教師として身に付けておくべき大切な資質です。

しかし、実際に子どもたちの指導に当たると、それだけでは十分ではないことに気が付きます。幅広い教養や豊かな人間性、そして優れた専門性を兼ね備えていなければ、教師としての職責を果たしていくことは困難です。

教職経験 30 年の清水教諭は語ります。

「教師で居続けるのではなく、教師であり続けたいと思っています。それは、毎年会う子どもたちにとって魅力ある授業をし続けることです。授業を通して、子どもたちの未来をひらくことです。自分なりに努力し、多くの同僚に支えられながら、今日までやってきました。しかし、道は半ばです。」

「教師であり続ける」、教職への誇りに満ちた言葉であり、教職の厳しさが感じられる言葉でもあります。

教師の資質や能力は、不断の努力によって高まり、同時に、同僚、保護者、地域との協働によって広がり豊かさを持ちます。現実の教職生活の中での生きた経験を通してこそ、教師は成長していくのです。

本冊子『よりよい自分をつくっていくためにⅣ』では、「大切にしたい授業づくりの基本要素」と「教師の授業づくりを支える学校体制」について示しました。

「大切にしたい授業づくりの基本要素」では、教師としての資質・能力の向上を願い、「観」（子ども観、教育観等）と「学習指導の基本技術」（板書や発問等）について、事例やコラムとともに示しました。

「教師の授業づくりを支える学校体制」では、各校の同僚性や協働性の高まりを期待し、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の校内研修等の事例を掲載しました。

多様性と変化を常とする現代社会において、私たちは、常に自己を磨き、高め続けなければなりません。本冊子が、「教師であり続ける」皆さんの一助となることを切に願っています。

平成 27 年 3 月

静岡県教育委員会義務教育課長  
林 剛史

# よりよい自分をつくっていくためにⅣ

## 目 次

### I 静岡県の教育

- 1 これまで大切にしてきたもの …………… 1
- 2 『よりよい自分をつくっていくためにⅠ・Ⅱ・Ⅲ』に込めたもの …………… 2
- 3 『よりよい自分をつくっていくためにⅣ』で目指すもの …………… 3
  - (1) 静岡県の教育の現状
    - ア 今、教育現場は
    - イ 今、教師の授業づくりは
  - (2) よりよい授業づくりに向けて
    - ア 学習指導要領の目標や内容を明確に押さえて授業を行う（押さえる）
    - イ 付けたい力に沿って効果的な手だてを仕掛ける（仕掛ける）
    - ウ 子ども自らが学習内容の理解を確かめる場を設定する（確かめる）

### Ⅱ 大切にしたい授業づくりの基本要素

- 1 「観」 …………… 9
  - (1) 子ども観
  - (2) 教育観
  - (3) 教材観
  - (4) 指導観
    - コラム：語り合い、高め合い、磨き合う
- 2 学習指導の基本的な技術 ……………13
  - (1) 話し方
  - (2) 話の受け止め方
    - 事例：子どもの学びをつなぐ   コラム：コアラを学校で飼いたいな
  - (3) 発問
    - 事例：子どもの問いを生かす   コラム：待つことの大切さ
  - (4) 板書の仕方
    - 事例：ねらいに沿った板書   コラム：よい授業はよい板書を残す
  - (5) ノート指導
    - 事例：ノートの使い方・理科ノート   コラム：私の宝物
  - (6) ICTの活用
    - 事例：タブレット端末を活用して   コラム：ICT機器を活用した授業への挑戦

<b>Ⅲ 教師の授業づくりを支える学校体制</b>	
1 全職員で深め共有する	……………23
(1) 付けたい力に照らして子どもの姿で語る	
事例：「付けたい力」を大切にするS小学校	
(2) 研修を工夫し、活性化させる	
事例：研修の視点を共有し合うY幼稚園	
事例：学校の特色を生かして校内研修の充実を目指すH小学校	
事例：職員をつなぎ、研修の日常化を目指すT中学校	
事例：「チーム英語科」で授業改善に取り組むN高等学校	
事例：P D C Aサイクルを効果的に活用した授業研究を目指すA特別支援学校	
事例：メンターチームを効果的に機能させO J Tに取り組むG中学校	
2 教育課程から考える	……………48
事例：「学力向上」を目指すM小学校	
<b>Ⅳ 資料</b>	
1 各種調査から見る国及び静岡県の学力・学習に関する現状	……………53
(1) O E C D生徒の学習到達度調査（P I S A 2 0 1 2）	
(2) I E A国際数学・理科教育動向調査（T I M S S 2 0 1 1）	
(3) 平成 26 年度全国学力・学習状況調査	
ア 見通しと振り返り	
イ 仲間との関わりを通して学びを深める	
ウ 一人一人のよさを認める	
2 静岡県教育振興基本計画「『有徳の人』づくりアクションプラン」第2期計画	
(1) 静岡県の教育の目標	
(2) 基本的な考え方	
3 『よりよい自分をつくっていくためにⅢ』	
(1) 子どもの学びを支える教師の役割	
(2) 教師の授業づくりを支える学校体制	

## I 静岡県の教育

### 1 これまで大切にしてきたもの

初めは、跳ぶのがこわくて、引っかかって転ぶんじゃないかと心配でした。でも、今は、全然こわくありません。風が体をすり抜けていく感じがして、とてもいい気持ちです。ふわっと跳ぶと、空気が気持ちいいです。自分がかんばれたのは、一緒に跳んでくれたり、いろいろなアドバイスやほめ言葉をくれたりした友達や先生がいたからです。(中略) 本当は、もうちょっと跳び箱をやりたいかったです。6年生になったら、あまりできなかった「大きな開脚跳び」や「かかえ込み跳び」も上手にできるようになりたいです。

「H25『よりよい自分をつくっていくためにⅢ』 体育科事例より」

これは、Mさんが授業後に自分の学びを振り返って書いた文章です。自分自身に期待を込めるMさんの言葉は、自らの学びの手応えから生まれたものです。Mさんの学びは、1時間の授業で完結することなく、次の単元や他の教科、次学年の学習へとつながっています。

本県では、これまで、生涯学習の視点と子ども中心主義という教育理念を基盤に、絶えず魅力ある授業を実現するための方法等を問い直し、子どもたちの人生を豊かにする営みとして学びの創造に取り組んできました。

教師用指導資料『未来をひらく子供』（平成10年～19年発行）では、学びの充実を図っていく上で、次のような子ども観、教育観を大切にしてきました。

- どの子どもにも、知的好奇心や思いやりの心があり、何かができる潜在的な能力を持っているという、温かで肯定的な子ども観
- 個々の能力や適性に応じて豊かな自己実現ができるように、子どもの学びを支えるといった教育観

このような、子ども観、教育観の下、私たち教師は、子どもを学びの楽しさに導くための「教材研究」と子どものよさを引き出すための「子ども理解」を柱として、魅力ある授業づくりを目指してきました。そして、魅力ある授業を実現するために問題解決的な学習を重視し、ひと・もの・こととの関わり合いの中で生まれた問いを生かした授業展開を大切にしてきました。

『未来をひらく子供』の後に発行された『よりよい自分をつくっていくためにⅠ・Ⅱ・Ⅲ』（平成21年～25年発行）では、本県の授業づくりにおける考え方等を継承するとともに、子どもたちが「学びの実感」を積み重ねることの大切さを訴えてきました。

こうした本県の長年の取組は、言うまでもなく子どもたちに「確かな学力」を身に付けさせるためです。

平成25年度、本県においては、全国学力・学習状況調査の結果から子どもたちの学力が大きな話題となり、授業改善とともに、この調査で好結果を出すことに力が注がれることになりました。そして、平成26年度は、調査開始以来全国との相对比较で低

下傾向が続いていた小学校の平均正答率が大幅に改善されるとともに、中学校も好結果を得ることができました。

この経緯の中で、「本調査やテストで点を取ることを目的とした授業にならないか心配である。」という声が聞こえてきました。しかし、当然のことながら、授業は子どもたちに「確かな学力」を身に付けるために行われます。

ここで、改めて「学力」について確認しておきたいと思います。

「学力」については、平成 19 年の学校教育法改正により、次のように法的に初めて規定されました。

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。(学校教育法第 30 条第 2 項)

この改正を受け、学習指導要領総則（平成 20 年 3 月）の教育課程編成の一般方針、学習指導要領解説総則編（平成 20 年 8 月）の改訂の基本方針においても、次のとおり同様の押さえがされています。

基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養う。(学習指導要領総則 教育課程編成の一般方針)

確かな学力を育成するためには、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させること、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむことの双方が重要であり、これらのバランスを重視する必要があります。(学習指導要領解説総則編 改訂の基本方針)

私たち教師は、これら学力の定義をきちんと押さえた上で、これまで大切にしてきた問題解決的な学習や子ども相互の関わり合いをより充実させることで、一人一人の子どもに「確かな学力」を身に付けるよう努めなければなりません。

## 2 『よりよい自分をつくっていくためにⅠ・Ⅱ・Ⅲ』に込めたもの

『よりよい自分をつくっていくために（平成 21 年 3 月発行）』『よりよい自分をつくっていくためにⅡ（平成 23 年 3 月発行）』では、「学びの実感」を積み重ねることによって、子どもの主体的な学びの姿勢を育み、学びの質的な向上を目指しました。

「学びの実感」とは、「なぜだろう」「こうしたらどうだろう」「できそうだ」「分かってきた」「納得した」「自分の言葉で説明できそうだ」「もっとやってみたい」といった、学びの過程でわき上がってくる手応えのことです。この「学びの実感」を一度きりで終わらせるのではなく、積み重ねていくことが、生涯にわたって自ら学び続けていく力につながっていきます。(『よりよい自分をつくっていくためにⅡ』P 2 より)

『よりよい自分をつくっていくためにⅢ（平成 25 年 3 月発行）』では、近年の各種調査結果等（PISA2009 H24 全国学力・学習状況調査等）から見えてきた国や本県の子どもたちが抱える課題、静岡

県教育振興基本計画「『有徳の人』づくりアクションプラン」等を踏まえ、「学びの実感」を積み重ねることによって、子どもの主体的な学びの姿勢が高められ、「確かな学力」が身に付くこと、そのことを通して自尊感情が高まることを説きました。

Sさんは、三角形の内角と外角の関係を基に説明しました。(……略……) これを受けてWさんやTさんは、「僕ならこうやって説明するよ。」と言って、Sさんの説明に関連付けて、同じ考えや似た考えをつないで発言しました。また、「ここが分からないからもう一度言って。」と反応する生徒もいました。そして、互いに説明し合う中で、「なるほど!」「すごい!」という声が自然に上がっていました。

「H25『よりよい自分をつくっていくためにⅢ』 数学科事例より」

子どもたちが、このような「学びの実感」を得るために、教師が授業や子どもの成長に対する思いや考えを共有し、学校体制で「学びの実感」を積み重ねる授業づくりが進められるよう、「子どもの学びを支える教師の役割」と「教師の授業づくりを支える学校体制」をイメージ図で示しました。(P55 イメージ図参照)

「子どもの学びを支える教師の役割」では、指導面から「学びの見通しを持ち、意図的に働き掛けること」を、評価面から「子どもを丁寧に見取り、指導に生かす評価を行うこと」を示しました。そして、学習指導要領に基づいて付けたい力を明確にし、指導と評価の一体化が図られた授業を繰り返し行っていくことによって、「確かな学力」を育むことを目指しました。

「教師の授業づくりを支える学校体制」については、教師一人一人の授業力向上を図るために、校内研修や教育課程の編成から教師の授業づくりを支える学校体制を確立させることの大切さを訴えました。

また、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の24事例を示し、各教科等における子どもの学びを支える教師の役割と学びの系統性についての理解を図りました。

### 3 『よりよい自分をつくっていくためにⅣ』で目指すもの

#### (1) 静岡県の教育の現状

##### ア 今、教育現場は

現在、学校には多方面から期待や要望が寄せられ、特別な支援を必要とする児童生徒への対応やいじめの未然防止への取組など多くの課題があります。こうしたことから、教師にとって最も重要とも言える授業づくりのための教材研究の時間を十分確保できない状況にあります。若手教師からは「教えてほしいことがあってもゆっくり相談する時間がない」、ベテラン教師からは「日々の業務に追われて若手教師を指導する余裕がない」「悩みをゆっくりと聞く時間がとれない」などの声を耳にします。2013年に経済協力開発機構(OECD)が実施した国際教員指導環境調査(TALIS)においても、日本の教師の忙しさが明らかになっています。

また、OECDの生徒の学習到達度調査(PISA2012)や国際教育到達度評価学会(IEA)の国際数学・理科教育動向調査(TIMSS2011)で

は、日本の子どもたちの学力に関する調査結果が回復している一方で、学習に対する関心・意欲・態度への肯定的な回答は、依然として低迷しており、深刻な状況が見られます。

さらに、今後約10年間で教師の年齢構成が大きく変わり、経験の浅い教師の全体に占める割合が高くなります。退職者が増えることで、豊かな指導経験を持った教師から経験の浅い教師への指導技術等の伝承が困難になることも予想され、静岡県全体の教育力の低下も懸念されます。ベテランの教師が長年の経験で培ってきた教育に対する考え方や子どもの捉え方、指導技術等を確実に継承し、さらに発展させていく必要があります。

## イ 今、教師の授業づくりは

多くの学校で「学びの実感」を大切にした授業づくりが行われています。丁寧に子どもの表れを見取り、例えば「はるきさんの考えは、他の問題にも使えるから大切だね。」と理由を明確にして価値付けたり、意図的に学び合う場を設定して、新たな視点に気付かせたりするなど、子どもの学びを支える教師の姿がたくさん見られます。

子どもたちは、粘土の塊を組み合わせて愉快的表情の顔をつくっています。そんな子どもたちの活動の過程を見取るために、S先生はデジタルカメラで子どもたちの作品を撮っています。その後、S先生は子どもたちへ「友達の作品を顔でまねしてみよう。」と投げかけます。



「Aさんの粘土の顔はこんな顔だね。」Bさんは、Aさんのつくっている大きな目をした作品を、自分の顔で真似して楽しそうです。その後、Bさんは自分の顔の作品の目やまゆ毛を大きく表現しました。「目とまゆ毛を盛り上げたんだね。Bさんらしい元気な顔になってきているよ。」S先生は、先ほど撮った画像の作品と比べながらBさんの工夫された表現を褒めています。S先生のように、子どもの学びを継続して見ていく中で、タイミングよく手だてを講じたり、理由を付けて認めたりしていくことが大切です。

「H21『よりよい自分をつくっていくためにI』 図画工作事例より」

各学校における校内研修の様子を見ると、多くの学校で子ども理解に基づいて個々の学びを捉え、「子どもの姿から教師の授業づくりを語る」研修が見られるようになってきています。

このように、授業や校内研修の改善が着実に進められている一方で、課題も見えてきました。

子ども一人一人が生き生きと学ぶ姿を目指すことは、もちろん大切なことです。しかし、その姿を求めることに気持ちが向きすぎて、授業の流れを子ども任せにしたり、全ての子どもの発言内容を認めようとしたりするあまり、学習指導要領の目標や内容から立てた授業のねらいに迫っていかない授業も見られます。

授業の目的は、言うまでもなく、どの子どもにも「確かな学力」を育むことで



す。授業を通して、例えば、「頭部、胸部、腹部の3つの部分があるのが昆虫だということが分かった。」「線対称の考え方を使って作図ができるようになった。」「未来形を学んだことで、自分の英語表現の幅が広がった。」など、子どもが学んだことを自覚できるようにする必要があります。また、教師として、子どもが学んだことを生かして文章を書く、問題を解く、物を作る、演技するなど、実際に「できる」ように指導するという責任感が必要です。加えて、子ども自身に学習内容が身に付いているという自信を持たせることも大切なことです。

## (2) よりよい授業づくりに向けて

では、どのような視点で授業改善を進めていけばよいのでしょうか。

県教育委員会では、平成25年度の全国学力・学習状況調査の結果を詳細に分析し、平成25年12月に次のア～ウの『授業改善の視点』を発信しました。

- ア 学習指導要領の目標や内容を明確に押さえて授業を行う（押さえる）
- イ 付けたい力に沿って効果的な手だてを仕掛ける（仕掛ける）
- ウ 子ども自らが学習内容の理解を確かめる場を設定する（確かめる）

### ア 学習指導要領の目標や内容を明確に押さえて授業を行う（押さえる）

授業を構想する段階では、子どもの学びを「確かな学力」の育成につなげるために、学習指導要領解説を熟読し、単元や1時間の授業で何を子どもたちに身に付けさせなければならないかを押さえる必要があります。

平成25年度の小学校の算数A問題に台形の面積を求める問題があります。この問題の本県の正答率は、全国の73.3%に対して63.7%と、10ポイント近く下回りました。

この原因を探ってみますと、本県の誤答の割合は、全国と比較して「2で割らないことによる誤答」が3.2ポイント、「上底または下底のいずれかしか用いていない誤答」が1.6ポイントそれぞれ

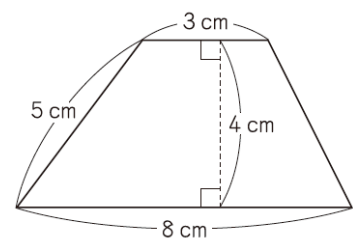
高くなっているということが分かりました。このことから本県の子どもたちは、台形の公式の意味の理解が浅いということが言えそうです。

面積の公式については形式的に取り扱うのではなく、公式の意味の理解を深めながら面積を求めることができるように授業で扱うことが大切です。

本県の小学校においても、実際の授業では、児童に「図で既習の平行四辺形等に帰着して考える」ことに取り組みさせており、児童が多様な解決方法を導き出す場を大切にしています。ただ、その後の展開で、一人一人の児童の発言（考え方や解決方法等）を認めることに教師の意識が向き過ぎて、どの方法もよい方法と終末でまとめてしまっているということはないでしょうか。

学習指導要領解説算数編（P150）には、この学習を通して「数学的な思考力や表現力を高めることをねらいとしている」「図形についての豊かな感覚や数学

(3) 下の台形の面積を求める式と答えを書きましょう。



的な考えを大事にして学習していくことが大切であることを感じさせることもねらいとしている」と示されています。

したがって、本学習の展開において、「どの方法もよい」というまとめで授業を終えてしまつては、学習指導要領に示されている内容を子どもたちに身に付けることはできません。児童の多様な解決方法の中で活用されている「数学的な考え方のよさ」を実感させるためには、子ども同士の話合いによって子どもが導き出した解決方法を比較して、各々のよさや問題点を明確にしたり、より適切な方法を押しえたりすることが大切です。

子どもが導き出した様々な解決方法を簡潔性や明瞭性、的確性、発展性等の観点で比較・検討することで、より確かな学習内容の定着を図ることができます。

## イ 付けたい力に沿って効果的な手だてを仕掛ける（仕掛ける）

授業では、子ども一人一人が学習指導要領に基づいた付けたい力を身に付けるために、教師が効果的な手だてを講じる必要があります。

大村はま先生の授業実践の中に、単元学習「私が生まれた1年間」があります。著書『教師 大村はま 96歳の仕事』の中で、この「私が生まれた1年間」の始まりに触れています。

小西さんという生徒が「私たちはどんなときに生まれたのかしら、調べてみたい」と言ったのが、あの単元のもとですね。昭和34年生まれの子もたちでした。その後半年間、私は、準備をしましたよ。みんなが急に言い出したからといって、「34年は、どんな年だったか調べてごらんさい」とか、そういうことをしたら、授業は、だめになってしまいます。

でも、昭和34年といっても、365日調べるわけにはいかないし、いろいろなことを考えて、とにかく準備に半年かかりました。資料を作るのにも長くかかりました。

何もしないで「じゃあ、調べてみましょう」「はい」で、どんな学力がつくと思われるのでしょうか。学力がつかないことは、学校ではやらないようにしないと困ります。「好きだから」「みんながやりたいと言いましたから」それでは困るので、準備をしなくてはならない。当たり前すぎることです。授業でしょう。

【大村はま著『教師 大村はま 96歳の仕事』（小学館）】

「仕掛ける」とは、決して教師主導で授業を進めることをイメージした言葉ではありません。子どもの学力を伸ばすためには、子どもが受け身でなく主体的に授業に参加することは重要なことです。子どもたちの活発な話合いによって進められていく「子ども主体の授業」、課題意識を持って試行錯誤を繰り返しながら作品をつくったり、技術を習得したりする「子ども主体の授業」で、教科・教材の本質に迫るためには、単元や1時間の授業を構想するとき、教材研究を深め、目の前の子どもの実態に合わせて、子どもに付けたい力を身に付けさせるための準備をしたり、授業中に子どものよさを引き出すための声掛けをしたり、本時のねらいに迫るための発問をしたりするといった教師の仕掛けは欠かせないものです。

「すごい。水をはじいたよ。これって何だっけ。」「ポリエステルだよ。」「綿は、水を吸うよ。しみこむよ。」自分たちの半袖の体育着に使われている綿、ポリエステルそれぞれの布を水に浸けたり、ぬらした腕に布を当てて水分を吸わせてみたりと衣服材料の吸水性に着目した実験を行いました。

これらの布は、先生が何種類もの布を用意して吸水実験をした結果、選んだものです。先生は、ポリエステルの布の上で水の玉がころんと転がって水をはじくことに感動し、導入時に生徒が興味や関心を持つと考えたのです。

実験の後で先生は、「どうして水をはじくポリエステルが体育着に使われているのでしょうか。」と発問します。

先ほどの実験では、不思議がり、面白がっていた生徒たちの心の中に、「汗を吸ってくれる綿が体育着に使われているのは分かるけれど、どうして水をはじくポリエステルも使われているのだろう。」と問いが生まれていきます。

「H23『よりよい自分をつくっていくためにⅡ』家庭、技術・家庭事例より」

## ウ 子ども自らが学習内容の理解を確かめる場を設定する（確かめる）

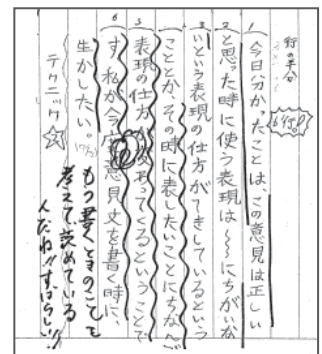
子どもが「分かった」と感じたことを確実に定着させていくために、学んだことが確かに身に付いているか、身に付けた力を発揮できるかを確認することが大切です。

確認する場の一つは、授業における「振り返りの場」です。多くの学校で、授業づくりのポイントに「振り返りの場」を設定することが挙げられています。しかし、「時間がなくなってしまう、十分な振り返りができなかった。」という経験はないでしょうか。学習を振り返ることについて、学習指導要領解説には、「事後に振り返ったりすることで学習内容の確実な定着が図られ、思考力・判断力・表現力等の育成に資するものと考えられる。」とその大切さが示されています。また、学習を振り返ることは、子ども自身が学んだことの達成感、充実感を味わうことになり、学習意欲の向上にもつながります。

振り返る場の設定については、1時間の授業ごとに行うことも考えられますが、数時間の学習内容をまとめて振り返ることも考えられます。

学習を振り返る場合は、授業の感想やがんばったことを書いたり話したりするだけではなく、単元や本時の目標を踏まえ、振り返りの視点や条件を与えて取り組ませるなど、内容や方法を工夫することが必要です。

もう一つの確認の場は、単元の節目や終末に、学習内容が定着していることを確かめるための練習問題やテストです。本県の「授業が分かる」と答える子どもの割合は年々高まっています（静岡県教育振興基本計画「『有徳の人』づくりアクションプラン」の実施状況等に関する年度末調査）。「分かる」と感じている子どもたちが、実際に「できる」ためには、定着を確認する練習問題やテストを行い、子どもが自分の学習の定着状況を理解する必要があります。そして、教師も子ども一人一人の定着状況を把握し、定着度が十分ではない子どもに対しては、授業中の支援や補足的な学習など、一人一人の学力を保証する指導に努めることが大切です。



#### 振り返りへの意識

平成 25 年度全国学力・学習状況調査の結果を見ると、本県の小学生は「テストで間違えた問題について勉強しているか」という問いに対して肯定的に回答する割合が、全国と比べて-5.9 ポイント、「苦手な教科を勉強している」と肯定的に回答する割合も、全国より-5.4 ポイント低いという実態が明らかになりました。このことから本県の小学生は、学習の振り返りに対する意識が低いことが分かります。

平成 26 年 1 月 学力向上推進協議会報告書より

#### 振り返る活動への意識

学校質問紙調査の「授業の後に学習内容を振り返る活動をよく行っていたと思いますか」については、小学校は全国よりは高いが、昨年度よりも 5.3 ポイント下がっている。中学校は、昨年度よりも 0.8 ポイント上がり、全国と比べても高い割合にあるが、60%に達していない。各学校で、児童生徒に真に付けるべき力は何なのか、児童生徒に身に付いた力をいつどんな方法で確かめることが適切であるのかを深く検討した結果、「確かめる」に対する研修が深められ、質の高さを求めていることで、数値が下がったものと推測される。

平成 26 年 12 月 学力向上推進協議会報告書より

教師一人一人が「授業改善の視点」の理解を深めて授業を実践するためには、教師同士のつながりをこれまで以上に大切にし、協働性を発揮して校内研修を充実させる必要があります。

校内研修では、付きたい力に照らして、教師が何を、どのように指導し、どの場面で、どのような方法で見取ったのか、手だては有効だったのか、子どもは何を身に付けたのかなど教師の働き掛けと子どもの学びから議論することが大切です。

そして、研究授業で明らかになった成果と課題を教師個々の授業づくりや日々の授業につなげ、研修を「明日の授業づくりにつながる」「よりよい授業をさらに求めていくきっかけになる」ものにしていくことが、教師の充実感を一層高めることに結びつきます。

本冊子では、『よりよい自分をつくっていくためにⅠ、Ⅱ、Ⅲ』で示してきた考え方を根底に置きながら、これまで先輩教師等から学んできた授業づくりの基本要素を確認するとともに、校内研修や教育課程の視点から、教師一人一人の授業改善を支えていく学校体制について述べていきます。

本県の教師は、子どもの成長を願い、子どもの笑顔を励みに、日々魅力ある授業づくりを目指して授業実践に取り組んでいます。これまでの授業改善への歩みを子どものさらなる成長へとつなげていくため、本冊子を積極的に活用いただきたいと思います。

## Ⅱ 大切にしたい授業づくりの基本要素

授業は、教師の経験や個性・持ち味、あるいは教科の特性など、様々なことが反映されます。しかし、授業づくりの基本要素となる「観」や「学習指導の基本的な技術」については、年齢や経験、教科を問わず共通する部分があるので、全職員で磨き合って高め合うことが大切です。

### 1 「観」

「観」とはものの見方や考え方、ものを見るとき視点（「子どもとは・・・」「教育とは・・・」）であり、日々の教育実践は、教師の持つ「観」に支えられています。

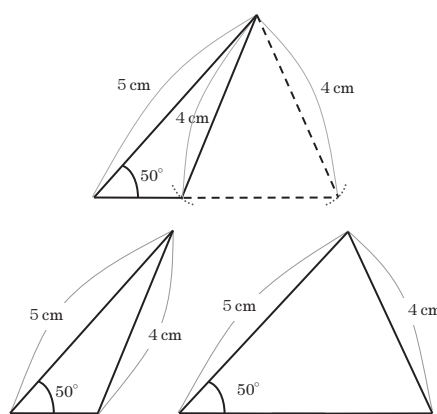
教師同士が協働して、よりよい授業を創造するためには、各教師が持っている子ども観や教育観について話し合い、磨き合って高め合うことが大切です。そうすることで、互いの実践への理解が深まり、組織として自校の教育目標の実現に向けた授業を創造することができます。

以下に、例として4つの「観」を示します。自分自身の「観」と比べたり、同僚と「観」について語り合ったりするきっかけとしてください。

#### (1) 子ども観

中学校2年生「数学」【単元名 三角形の合同条件】

「一つの角と二つの辺が等しければ合同だ。」という考えに、「ちょっと違う。二つできちゃうんだよね。」とBさんがつぶやきます。K先生は、「じゃあ、Bさん前に出てきて説明してくれる。」と促します。「はい、でも気付いたのは、C君だから、C君に譲ります。」とBさん。C君は図のように二つあることを示して、合同と言えないことを説明しました。やわらかい雰囲気の中、話し合いが深まっていきます。どの生徒にも自分の居場所があり、全員が安心して授業に臨んでいます。K先生の授業は、いつもこのような雰囲気の中で展開されています。



こうした授業を成立させる根っこにあるものは何でしょう。それは、K先生の子ども観にあるようです。

「私は、『子どもは白紙だ、書き込め』という考えにはなじめません。私は、『子どもは自ら課題を持ち、試し、考え、表現する中で、よりよく問題を解決していく力を持っている存在である』と信じています。」という、K先生の肯定的な子ども観が、子どもたちの生き生きとした姿を引き出しているのではないのでしょうか。

学級の子どもたちの言葉が、それを物語っています。

「先生は、質問すると、『疑問を持ったこと自体に大きな価値がある』と褒めてくれる。」「先生は、すぐに答えややり方を教えてはくれない。その代わりに、やる気が出る励ましや考える視点を与えてくれる。」「難しい問題のときは、じっくり考える時間をくれる。一人で考えることも大切だと言うけれど、みんなで知恵を出し合って解決することも同じように大切にしたいとよく話してくれる。」

温かで、肯定的な子ども観は、教育の原点です。

◆あなたの子ども観…「あなたは、子どもをどのように捉えていますか。」

## (2) 教育観

K先生の子どもたちの学びを支える姿勢や子どもたちの言葉からは、K先生の持つ教育観も伝わってきます。それは、「個々の能力や特性に応じて、子ども一人一人が豊かな人生を歩むために、生涯にわたって学び続ける土台をつくる」という教育観です。

私たち教師は、子どもたちが学校を巣立った後も、自分のよさを大切にして最善を尽くし、自己実現を目指していくことを願っています。

K先生は、子どもの学びを、子ども一人一人の表れから捉え、今自分にできることは何かを問い直した結果、このような教育観に至ったのです。そして、難しくとも、極めてわずかなものであっても、一人一人の変化をその子の伸びやよさ、可能性として見付け出し、それを自覚させながら、生涯にわたって学び続ける土台をつくっていくことが、教師の仕事であると考えようになったのです。

◆あなたの教育観…「あなたは子どもたちに対してどんな願いを持っていますか。」

## (3) 教材観

教材は、学習指導要領に示された内容を子どもたちに身に付けさせるために活用される素材（事実や事象、資料等）であり、教材は、子どもの学びに有効に働いて初めて教材としての価値を得ます。

小学校4年生、社会科の「ごみの行方を追って」の授業です。「一週間、家庭のごみ調べをしよう。」と言われた子どもたちは、この調査を通してごみの量に驚いたり、種類別に袋に入れられることに気付いたりして、「ごみの行方」が教材になっていました。しかし、Nさんは、「いやなおいがするからやりたくないな。」と調査をやめてしまいます。この時点では、「ごみの行方」は、Nさんにとって教材とは呼べません。ところが、Nさんは、次のごみ収集の見学から態度が変わります。「あのいやなおいがするごみを、おじさんたちは一生懸命に積んでいた。すごいな。」と思ったのです。積極的におじさんたちに質問をして、「ごみを正しく出さない人がいて困る。」ということを知り出し、次第にごみ処理に対して関心を高めていきます。ここで初めて、「ごみの行方」がNさんの教材になったと言えます。このように、教材を「教師が準備し、与えるもの」から「一人一人の子どもの学習対象となるもの」と捉えることにより、個の学びに応じた教材の選び方や与え方が見えてくると思います。

◆あなたの教材観…「教材を考えたとき、どんなことに気を付けていますか。」

#### (4) 指導観

教師は、学校生活の様々な場面で、そして時には、学校外において、子どもたちを指導します。全ての指導は、一人一人の子どもたちの成長のためです。

では、私たちは、どのような指導観を持ったらよいのでしょうか。指導には、手順を明示するような指示、視野を広げるための示唆的な指導、後ろ姿で教えるような感化的な指導、緊急時の命令的な指導等があります。時には厳しき（例：教師の指導性を強く発揮する指導）が必要であり、時には子どもに寄り添う柔軟さ（例：子どもの思いや考えを尊重した指導）が必要です。この子のために、この学級のために、この学年のために今必要な指導は何かを見極め、子どものよりよい自己実現を願い、しなやかに対応するといった指導観を持つことが大切です。

授業で考えてみましょう。

目の前にいる子どもたちは、それぞれ個性を持っています。どんな課題にも興味を持って取り組む子どもがいる一方で、Nさんのように、始めは学習に積極的に取り組むことができない子どももいます。学習集団についても、しつとりと落ち着いた集団、元気がよく活発な集団など、様々です。また、教科や教材、本時の目標によって、じっくり考えることを大切にする、体験を積み上げていくことを重視するなど、活動の重点も異なります。

一人一人の子どもや学習集団の実態、教科・教材の特性や本時の目標等によって、教師が子どもに指導する際にとるべき行動（指示、支援、示唆、感化、命令等）は違ってきます。

多くの先生方は、子ども一人一人の思いや考え、発想等を生かしながら、単元や本時の目標に迫っていくように、柔軟に構想を修正しながら展開していく授業を目指しているのではないのでしょうか。子どもが主体的に取り組むことで、学習内容がより効果的に身に付くことを考えると、それはもちろん大切なことです。しかし、教師がやり方や模範を示して、子どもに取り組ませたり、教師が学習内容を説明して子どもに理解させたりすることで効果が上がる場合もあります。大切なことは、幅広い指導方法を念頭に、しなやかに対応するといった指導観を持つことではないのでしょうか。

◆あなたの指導観・・・「授業で子どもに関わるときに、どんなことに気を付けていますか。」

教師の持つ「観」は、様々ですが、多くは自らの経験に基づいているのではないのでしょうか。変化の激しい社会を生き抜いていくために必要な資質や能力を子どもたちに確実に身に付けさせるためには、自分が受けてきた授業などの経験だけに捉われることなく「観」を磨く必要があります。互いの授業を参観し合い、子どもの様子を語り合ったり、指導上の悩みを相談し合ったりすることで、教師としての視野を広げていきましょう。

## コラム 「語り合い、高め合い、磨き合う」

A中学校の校内研修は、授業研究を柱として取り組んでおり、授業後の全体研修を重視しています。研究授業について分析し、よりよい授業の創造につなげていくことはもちろんですが、授業参観を通して、子どもの学びの姿を教職員みんなで語り合うことが、互いの「観」を磨き合うことにつながると考えているからです。

B先生が行った社会科の授業研究の事後研修でのことです。協議では、子どもたちが、「織田信長が行った政策」について話し合っている場面でのCさんの発言が話題になりました。

Cさんは、「豊臣秀吉だったらどうしただろう？」という素朴な疑問を投げ掛けたのです。B先生は一瞬戸惑いました。なぜなら、その発言は次時以降に扱う予定の内容だったからです。B先生はしばらく考えた後、Cさんの発言を生かし、単元の目標や本時の目標を頭の中で確認しながら、その後の活動を修正していきました。Cさんの発言を大切にすることで、子どもたちは、秀吉の政策との比較を通して、信長の業績をより多面的に捉えることにつながりました。

協議では、B先生がCさんの発言を「次の時間に考えることだから。」と後回しにせず、授業を修正していったことについて、活発に意見が交わされました。「Cさんの発言を取り上げ、授業の流れを修正したことは、次時以降の学習に影響が出るのではないか。」という意見も出されましたが、B先生の語る「子どもの考えたい、学びたいという思いを大切にしたい。個々の表れを多様に想定し、柔軟に授業を構想することが大切だ。」という考えに、他の先生方も、「Cさんの発言によって、子どもたちは本時の目標に迫ることができたと思う。」など、本時の子どもたちの学びの姿に結び付けた意見が出されました。先生方の熱心な協議は「教材研究が深くなされており、単元の目標や単元における本時の位置づけをきちんと押さえているからこそ、多様な子どもの考えを受け止めることができる」「子どもの思いを大切にすることで、学ぶ意欲を高めることができる」といった、指導観にまで広がっていきました。

協議の中でD先生は、「自分の授業では、想定した展開で授業を進めたいという思いが強くて、子どもの発言を取り上げていないように思います。B先生の対応を見て、子どもの思いや考えを生かして授業を進めることの大切さに改めて気付かされました。」と語りました。D先生にとっても、指導観が磨かれた研修となりました。

校内研修などの場において、このような取組を積み重ねていくことで、教師の「観」が磨かれていくのではないのでしょうか。





## 2 学習指導の基本的な技術

学習指導の技術を身に付け、磨いていくことは、子どもの学習意欲を高めたり、学習内容の理解や定着をより確かなものにしたる上で、とても大切なことです。

静岡県では、授業づくりの基本的な構成要素をP（構想）、D（展開）、C・A（評価・改善）の視点から整理した「授業づくり規準」\*を作成し、一人一人の教師の授業づくりを支援しています。ここでは、学習指導の基本的な技術として、「授業づくり規準」で取り上げている指導技術等を参考にしながら、大切にしてほしい内容を示しました。「◆」は、「授業づくり規準」の内容を中心に記しています（授業づくり規準に記載されていない内容も取り上げています。）。

\* 授業づくり規準（総合教育センター発行）

参照 [http://www.center.shizuoka-c.ed.jp/shizuoka\\_standard/S00kyotu.pdf](http://www.center.shizuoka-c.ed.jp/shizuoka_standard/S00kyotu.pdf)

### (1) 話し方

#### ◆音声・表情・所作等

- ・話し方や表情・所作と子どもの反応との関連を意識する。
- ・場面や目的等に応じて、話す声の大きさ、速さ・緩急・強弱等や表情を工夫する。

話すときに心掛きたいことは、子どもを引き付ける話し方をすることです。時と場や子どもの発達段階等を考慮し、子どもの心に届く話し方を意識しましょう。

#### <子どもを引き付ける話し方>

- ・最も伝えたい要点を短く簡潔に話す。
- ・聞いている子どもの頭の中に、具体的なイメージが浮かぶように事例を交えながら話す。
- ・分かりやすく順序立てて話す。
- ・子どもの表情やつぶやき等をつかみ、「間」をとりながら話す。

### (2) 話の受け止め方

子どもは、「自分の話を聞いてくれる」「自分を受け止めてくれる」教師に対して安心感を持ちます。子どもの話を聞くことは、子どもとのよりよい人間関係（信頼関係）をつくる第一歩です。子どもは正解を求める以上に、共感を求めています。子どもの話す言葉や心の声に、常に新鮮な気持ちで耳と心を傾けましょう。

#### <子どもが安心して話ができる受け止め方>

- ・子どもの話を受容的・肯定的な構えで相づちを打ちながら、先入観にとらわれずに聞く。
- ・最後まで子どもの言葉を聞くとともに、子どもの表情や態度から思いや考えを読み取る。

## 事例「子どもの学びをつなぐ」

小学校1年生の算数です。問題文から、足し算の式になるのか、引き算の式になるのかを考えています。

のりさんは、折り紙を12枚使いました。おねえさんは6枚使いました。2人が使った折り紙は、何枚でしょうか。

この問題で子どもたちの考えが分かれました。

C1 「使うということは、少なくなるということだから  $12 - 6$  だと思います。」

C2 「何枚ですかと聞かれているから使った枚数を合わせて、 $12 + 6$  になると思う。」

M先生 「うーん…みんなはどう思う？」

M先生も一緒に悩みながら、子どもたちの考えを把握しようとしています。子どもたちは、「足し算だよ。」「引き算だと思う。」と、口々に自分の考えを主張しています。

M先生は、子どもたちの発言を笑顔で聞いています。

M先生 「色々な考え方があるようだから、ノートに自分の考えを書いてみよう、難しいと感じる子は、ブロックを使って考えてもいいよ。」

M先生は子どもたちに次の活動を明確に伝えます。子どもたちは、各自課題追究へと入っていきました。M先生は、誰がどのような考え方をしているのか、対話をしながら、把握しようとしています。そんな中で、課題解決につながるポイントとなる思いも見付けることができました。



個々の考えを全体に広げていく場面です。M先生は一人一人の考えを、うなずきながら大切に受け止めています。なかなかまとまりませんが、そこで、「前に勉強した逃げたカブトムシの問題を、どんなふうに解いたか覚えているかな。」と尋ねました。

すると、Aさんが「カブトムシが7ひき逃げて、次の日も4ひき逃げて、全部で何ひき逃げたかという問題だった、そのとき『逃げました』という少なくなる言葉が2回出てきたのに、足し算を使った覚えがあるよ、だから折り紙の問題も同じじゃないかな。」と発言しました。続けてBさんは「お菓子屋さんで50円使って、別のお店で20円使ったとき、全部で70円使ったよ。どうやって70円になったか考えたら、50円と20円を合わせて70円になったよ。だから折り紙も使った枚数を全部合わせて  $12 + 6$  になると思う。」とつなげました。2人の考えを聞いたとき、「あっそうか。分かったぞ。」「足し算でいいんだ。」という声が聞かれました。M先生は、「何が分かったの。」「足し算でよい理由を教えて。」とその理由を短く問い返すことで、子どもたち自らが理解できるように導きました。M先生が、子どもたちの発言を一つ一つ大切に受け止めることによって、子どもたちの学びがつながり、深まっていきました。

本時の問題と既習事項をつなぐ話し方、子どもの思いに寄り添った話の受け止め方が、本時の付けたい力へと向かう有効な手だての一つとなっていました。

## コラム 「コアラを学校で飼いたいな」

K先生は、子どもの話を聞くときに、子どもの言葉を最後まで聞くことと同時に、その子が今、どんな思いを持って話しているのか、表情やしぐさからも読み取ることを大切にしています。

1年生の生活科の授業です。クラスで生き物を飼って、大事に育てていこうということになりました。K先生の「どんな生き物を飼おうか。」という問い掛けに対して、子どもたちは「コアラ。」「ポニー。」「ゾウ。」など自由につぶやきます。K先生はそんな子どもたちのつぶやきを「いいね。」「動物園みたいで楽しそうだね。」と、しっかり受け止めていきます。子どもの思いに寄り添い、肯定的に話を受け止めることは、深い子ども理解へとつながります。

K先生は、「教室で飼えること」、「みんなできちんと世話ができること」等、条件を整理して、もう一度「コアラは学校で飼えるだろうか。」と、子どもたちに問い返しました。「コアラの本物を見たことがないから飼えるか分からないよ。」「コアラは高い木がないと飼えないかもしれないな。」子どもたちの表情は真剣そのものです。「生き物大好き」という単元のねらいに迫るためには、子どもが飼ってみたいと思う生き物でなければならないというK先生の思いが伝わってきます。

K先生の素晴らしさは、子ども一人一人の「誰かに伝えたい、聞いてもらいたい」という思いを、いったん丸ごと受け止めているところです。子ども一人一人の言葉を大切に聞き取り、その子が今何を考えているのか、どんなことで困っているのか等、その子の思いを把握し、付けたい力へと向かうように問い返したり、他の子どもの考えとつなげたりしています。「どこから連れてくるのか。」「えさはどうするのか。」と、子どもたちが話し合いを進める中で、自分で考え、見付け、判断していく過程に学びがあるのです。K先生の、子どもの思いに寄り添い、語り掛けながら、子どもとともに授業をつくっていく姿勢が、子どもの主体的な学びを引き出すことにつながっていきます。



### (3) 発問

#### ◆指導技術（発問）

- ・子どもが何を問われているか分かりやすい発問をする。
- ・ねらいを達成するために、子どもの思考を促したり、焦点化したりする発問をする。

発問は、子どもの内にある思いや考えに働き掛けるものです。発問によって、子どもたちの追究の勢いや方向が左右されます。学習の見通しを持てるようにしたり、多様な考えを引き出したり、一人一人の思考を活性化したりする発問を心掛けましょう。

<付けたい力に迫り、子どもの思いや考えに働き掛ける発問>

- ・子ども一人一人の思いや考えをつなぐ発問
- ・子どもと教材等をつなぐ発問
- ・一問一答に終わらないで、子どもの多様な反応が期待できる発問
- ・考えを広げたり、深めたりする発問

### 事例「子どもの問いを生かす」

小学校2年生 算数「長さの単位と測定」の導入場面です。本時の目標は、1年生で学んだ直接比較や間接比較、任意単位を用いた比較の学習の上に立って、「基準の大きさとなる長さとして、身の回りの適当な長さ（任意単位）ではなく、普遍単位を用いることの必要性に気付かせること」です。授業を通して、単なる知識や技能の習得だけで終わらず、普遍単位を用いる「必要性」や「便利さ」等を子どもに実感させることが大切です。

S先生は、粘土で作ったへびの長さを電話で友達に伝え、長さを比べるという場面を設定しました。

互いの粘土のへびが見えない場所で、AさんとBさんが話します。

Aさん「僕が作ったのは、鉛筆3本分だよ。」

Bさん「僕が作ったのは、鉛筆5本分だよ。」

S先生「どっちの方が長いと思う？」



(※「どっちが?」「一番～なのは?」等、知的好奇心をくすぐる問い掛けに、子どもたちは、引き付けられる。)

C 「Bさんだと思う。」

C 「Bさんに決まってるよ。」

S先生「それは、どうして。」

(※ 問い返し・切り返しの発問が重要。それにより、思考を深めたり、根拠を基に理由を説明したりする力が身に付いていく。)

C 「だって、前の時間にやったじゃん。」

C 「3本分と5本分だと5本分の方が長いって。」

S先生「なるほど。数が大きい方が長いんだね。」

「どちらが長いか実際に見てみよう。」

C 「あれ。3本分と言ったAさんの方が長い。」

C 「え～、なんで。」

S先生「おかしいね。なんでかな。」



(※ 既習事項や予想との違い等から生じる「あれっ?」という思考のズレを生かした発問は、子どもの思考を深める。)

子どもの思考を丁寧に見取り、子どもの問いを生かして発問することによって、子どもの思考に沿った学習を展開することができます。子どもたちの思考は深まり、学習意欲も高まっていきます。

発問後、すぐに発問を変えたり、補足説明をしたりすることはありませんか。

### コラム 「待つことの大切さ」

中学校1年生の道徳の授業でした。授業が始まってから、子どもたちは、登場人物のAさんの気持ちを想像しながら、自分の思いや考えを積極的に、そして素直に表現し合っていました。



授業の山場を迎えたときです。D先生は、「Aさんの胸にこみ上げてきた熱いものとは何だろう？」(中心発問)と子どもたちに問い掛けました。すると、教室は、水を打ったように静まりかえったのです。5秒、10秒…沈黙は続きました。

さらに沈黙は続きました。

ついに、Fさんが手を挙げました。D先生は、ゆっくりと指名します。Fさんは、自分の経験を重ねながら考えを語り始めました。すると、この発表をきっかけに、周りの子どもたちも堰を切ったように思いや考えを話し始めたのです。その勢い、迫力を今でも鮮明に覚えています。

D先生が子どもを信じて待つことができたのは、沈黙する子どもたちの表情から必死で考えている様子をしっかりと見取ることができたからでしょう。「待つことも一つの発問」そう感じた1時間でした。

#### (4) 板書の仕方

##### ◆指導技術(板書)

- ・子どもの様子を観察しながら、板書する。
- ・ねらいや学習内容を踏まえ、子どもの思考活動との関係を押さえて板書する。
- ・子どもが自分の考えなどを板書する場面を想定して、板書を構想する。

板書は、学習内容を視覚的に整理し、子どもの理解や思考の助けとなるものです。子どもの思考を明確にし、例えば、1時間の授業を子どもが振り返ることができるような板書、課題解決を図るために参考となる板書を心掛けましょう。

また、板書計画を立てても、実際の授業では、子どもの発言や疑問等によってその計画を修正していく必要があります。深い教材研究、子ども理解によって柔軟な対応が可能となります。

##### <子どもの理解や思考の手助けとなる板書の仕方>

- ・子どもの発言を最後まで聞き、子どもが本当に言いたいことをきちんと捉えて板書する。
- ・発達の段階に応じて、書く速さ、文字の大きさや量、色の使い方を考えたり、視覚に訴える資料を使ったりする。
- ・子どもが、ネームプレートを使って立場を明らかにしたり、直接黒板に自分の意見や絵、図等をかいて説明したりするなど、子どもが板書に参加する機会をつくる。

## 事例 「ねらいに沿った板書」

子どもの思考を助け、授業のねらいを達成するために板書を工夫することが大切です。次の板書は、国語科「ごんぎつね」のもので、この単元では「登場人物の気持ちの変化を紹介カードで紹介する」という言語活動を通して付けたい力の実現を図りました。

また、子どもたちも付けたい力「登場人物の気持ちの変化を捉える」ためにこの学習をしていることを自覚し、学んでいます。めあてをはっきりと板書したり、教師のモデルを示したりして、子どもたちの活動に見通しを持たせる工夫をしています。

既習の「モチモチの木」で教師が作った紹介カードは、子どもたちが紹介カードを書くためのモデルになります。本時において子どもたちは、紹介カードのこの部分を書くということが分かり、意欲的に書き進めていきました。

子どもたちの自然な交流を生むために、自分の考えの根拠とした表現に、ネームプレートを貼らせました。

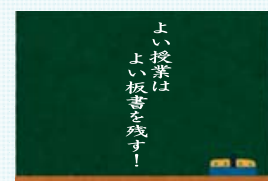
友達は何の表現に着目して気持ちの変化を捉えようとしているのかを参考にすることができるように、自分の捉えた変化の根拠になる部分を挙げさせました。自分が根拠にしたところ以外の叙述にも目が広がり、より深く内容を理解することにつながりました。

### コラム「よい授業はよい板書を残す」

私は、同じ学校に勤務するT先生のような授業をしたいと思っています。T先生の授業では、子どもたちが生き生きと授業に臨んでいます。同じ国語科を担当する私も、こういう先生になりたい、こんな授業をしたいと強く思っています。

T先生の授業に少しでも近づくために、T先生の授業をたくさん参観したいと思いました。しかし、自分の学級や授業のこともあり、頻繁にはできません。そこで、どうしてもT先生に近づきたい私は、休み時間にT先生の授業後の教室に行くことにしました。目的は、T先生の板書を写真に撮るためです。板書からは、T先生の意図が伝わってきます。子どもの思いも読み取れます。何よりも板書から子どもたちの声が聴こえてきます。

「よい授業はよい板書を残す」と私は思います。授業を見ることができなければ、せめて板書だけでも真似してみよう。T先生を目指す私の第一歩はここから始まりました。



## (5) ノート指導

ノートは、学習内容の理解を深め、その定着をより確かなものにしたり、論理的な思考力を育んだりするなど、子どもの学びを支える大切なものです。

また、学習の足跡が記されたノートは、新たな課題を解決する場面や家庭学習（復習等）の場等で、学習内容を振り返る際に重要な役割を持ちます。

<子どもの学びを支えるノート>

- ・課題に対して自分が考えたこと、観察・実験や調査したこと、資料などを通して分かったことや考えたこと、疑問などが記されている。
- ・授業の流れを踏まえて、自らの思考の流れが分かるように記されている。
- ・誤答も思考の足跡として消さずに残し、訂正箇所にはその根拠などが記されている。
- ・その時間で教師が押さえない内容や自分の考え、共感した友達の考えが整理して記されている。
- ・教科の用語を正しく使って記されている。

### 事例 「ノートの使い方」

ノートの使い方（まとめ方）については、「使い方（まとめ方）の約束」を決めておくことが大切です。学年や学校で、基本的な約束事を統一しておくこと、友達や上級生のノートづくりを学ぶことができ、自分のノートづくりに生かしやすくなります。

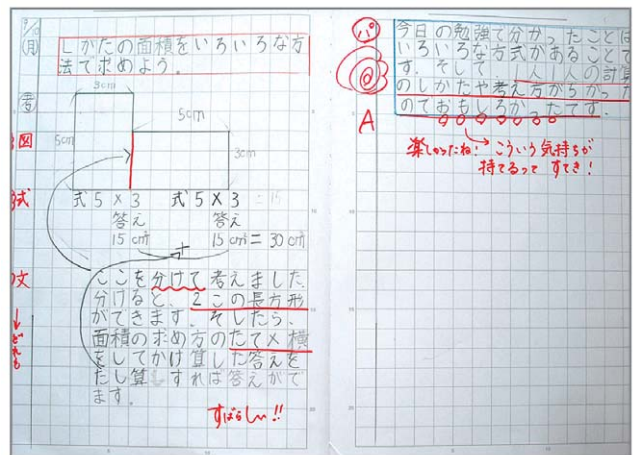
また、ノートを通して1時間の授業における思考が整理されるとともにそれまでの学びを振り返ることができます。

#### 【約束例】

- 本時のめあてや学習課題を書き、赤で囲む。
- 自分の考えは、「言葉」、「図」、「式」等で、算数的な表現や教科の用語を用いてまとめる。
- 単元や本時のまとめを書き、青で囲む。

#### 【留意点】

- 学習指導要領に則って、教科の用語を用いる。



### 事例 「理科ノート」

理科の学習では、「問題」「予想」「理由」「実験」「結果」「考察」「まとめ（結論）」という問題解決のプロセスが分かるようにノートをまとめていくことが大切です。

## 【理科のノートづくりのポイント】

### 問題

問題を書く。

### 予想・理由

体験や既習事項をもとに問題に対する自分の考えとその理由を書く。

### 実験・結果

実験から得られた情報（事実）やデータを表やグラフに整理する。

### 考察

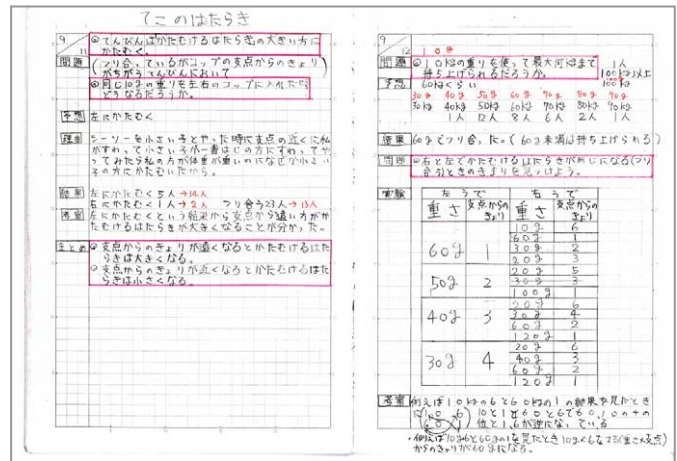
「結果と予想を比較して書く」「自然現象をある要因と関係付けて書く」「結果の差を実験条件に着目して書く」など、考察する視点を教師が示す。

この授業（てこのはたらき）では、児童が、「つるしたおもりの支点からの距離の違い」や「てこを傾ける働き」について予想と結果とを比較して書いています。

### まとめ（結論）

「問題」文に対応した「正解」を文章や図でまとめる。その際、教科の用語を使うことを大切にしたり、学習した内容を日常生活の様々な場面に適用したりして記述する。

右上のノートでは、「支点」や「支点からの距離」が教科の用語に当たります。このノートを見ると「支点からのきよりが遠くなると、かたむけるはたらきは大きくなる。」とまとめています。



## コラム「私の宝物」

成人式に出席しました。久しぶりに会う子どもたちは皆、当時の面影を残しつつも、たくましく、美しい青年へと成長していました。成人式終了後、母校の小学校へ移動し、タイムカプセルを開けることになりました。タイムカプセルを開けるとワッと歓声が上がリ、当事の写真や夢中になっていたカードゲーム等、大切にしていたものとの再会を喜ぶ姿が見られました。

喜びに沸く輪から離れ、Rさんが私の元に駆け寄ってきました。「先生、これ覚えてる？」Rさんは、私に1冊のノートを差し出しました。「私、算数は苦手だったけれど、先生がたくさん励ましの言葉を書いてくれたから、がんばろうって思ったんだよ。」

ふっと放課後の教室で、分数の計算練習をするRさんの姿が思い浮かびました。分数の割り算に四苦八苦しなう取り組むRさん。花丸をもらって大喜びするRさん。その横で、一緒に喜ぶ私。

Rさんは真剣な目で、こう語りました。

「先生、私、このノートを宝物にするね。これを見たら、がんばろうって気持ちが湧いてきたから。」

私は、ノートを両手で抱えながら友人たちの輪へ戻るRさんの後ろ姿を見つめながら、「これからも子どもの学びをしっかりと支えていこう」そう心に誓いました。





## (6) ICTの活用

### ◆指導技術（教材・教具の活用、資料提示）

- ・子どもにとって、どんな教材・教具・資料がよいかを考え、活用する。（ICTを含む）

ICT\*の活用は、教科等の目標を達成するための有効な手だての一つです。教師と子どもが効果的にICTを活用し、ねらいに迫る授業を展開しましょう。

#### <授業での教員によるICT活用>

- ・授業のねらいを示すために活用
- ・子どもの興味・関心を高めるために活用
- ・学習課題や学習内容などの説明をより分かりやすくするために活用

#### <授業での子どもによるICT活用>

- ・情報を収集・選択したり、共有したりするために活用
- ・文章や図・表にまとめ、自分の考えを分かりやすく伝えるために活用
- ・学習内容の定着をより確かにするために活用

### 事例 「タブレット端末を活用して」

K小学校は、「教科目標の実現を目指したICT機器の効果的な活用」を校内研修の柱として取り組んでいます。

教職経験5年目のH先生は、図画工作の授業で、『身の周りの不思議な一場面を切り取ろう』という題材を計画し、デジタルカメラを班に1台用意しました。子どもたちは思い思いに不思議な場所を探しに出掛け、普段見慣れている植物や遊具等にカメラを向けました。子どもたちは、撮影する角度や倍率を何度も何度も変え、ファインダーに写る興味深い世界に感動しながら、生き生きと活動しました。

友達の作品を鑑賞する際に、H先生は班に1台、タブレット端末を用意しました。子どもたちは、撮影した写真に改良を加え、互いの作品を並べて比較したり、全体発表の時に手元で自分が選んだ作品を大画面に拡大して紹介したりしました。タブレット端末の活用は、友達と考えを共有したり、意見を交換したりするための有効な手だてとなりました。



K小学校は、ICT機器が授業の目標を達成するためのツールであることを踏まえ、発達の段階、教科、具体的な活用目的や場面などに留意しています。そして、学びの充実を図るためにどのように授業に取り入れていくかを考え、子どもたちにとってよりよい授業を目指して研修を続けています。

#### \* ICT

Information and Communication Technology の略で、コンピュータやインターネットなどの情報通信技術をいいます。ICT機器には、タブレット型PC、電子黒板、プロジェクタ、デジタルカメラ、実物投影機等があります。

## コラム「ICT機器を活用した授業への挑戦」

「わたしは正直に言うと、ICT機器を活用した授業に抵抗感がありました。いろいろな機器の操作に自信がなかったこと、何よりICT機器をあえて使わなくても授業はできると思っていたからです。でも、今は違います。ICT機器の効果的な活用によって、子どもたちの意欲が高まり、より確かに学習内容が定着していると感じます。普段落ち着きのない子どもも、授業に集中できるようになっています。」

こう語るのは、F中学校で家庭科を担当しているベテランのG先生です。G先生は、授業の導入や学習課題の提示、まとめの段階など場面をしぼり、効果的にICT機器を活用するようにしています。ここでは、実物投影機の高さをいくつか紹介します。

- 教科書等の挿絵や写真を大きく映すことで、子どもの意識が画像に集中し、興味や関心を引き出すことができます。
- 作業や操作の手順を大きく映しながら説明することで、作業や操作の手順が短い時間で分かりやすく伝わります。授業時間に余裕が生まれ、子どもはじっくりと作業や操作に打ち込むことができます。これは、ノートや原稿用紙の使い方を指導する際にも応用できます。
- 子どものノートやワークシートを大きく映すことで、考え方やアイデアを短時間で共有できます。
- まとめ段階では、子どもの作品を大きく映すことで、その作品の優れた点を共有できます。そのため子どもが自分の作品を振り返り、改善点に気づきやすくなります。



ICT機器はねらいを明確にして活用することで、子どもに付けたい力を付けるための強力な道具となります。まずは、ICT機器を使ってみてください。子どもの表れから、その効果の大きさに気付くはずですよ。ICT機器を活用したことのない先生は、「大きく映すこと」から始めてみませんか。

ここまで、「観」と「学習指導の基本的な技術」について述べてきました。

各学校には、優れた指導技術を持った教師がたくさんいます。そうした教師は、先輩教師等から基本を学び、実践することで自らの指導技術を磨いてきました。先輩教師の卓越した指導技術の裏側には、真摯に学ぶ姿勢と常に基本を大切に、絶え間なく積み重ねてきた努力があります。若手教師は、先輩教師からその教育に対する考え方や姿勢、指導技術を積極的に学び、自身の指導力向上を図っていきましょう。

### Ⅲ 教師の授業づくりを支える学校体制（学校：幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校）

「学びの実感」を積み重ねることを通して、どの子どもにも「確かな学力」を育むためには、教師一人一人が授業力の向上を図るだけではなく、学校として教師の授業づくりを支える体制をつくるのが大切です。

#### 1 全職員で深め共有する

教師の授業づくりを支える学校体制の一つが校内研修です。校内研修の中心は、授業研究です。

校内研修では、まず、「研修テーマ」や自校で目指す「研修テーマを具現化した子どもの姿」について共通理解を図ります。

そして、授業研究を通して、自校の育てたい子どもの姿や目指す授業像等を付けたい力と子どもの姿から検証し、研修の成果や次への課題を全職員で深め、共有します。こうした取組を積み重ねていくことにより、学校としての方向性が一層明確になり、教師一人一人の研修意識も高まっていきます。

各学校では、これまで以上に高い意識を持って、校内研修の充実と一人一人の教師の授業改善へ向けた取組が進められています。

これからも、全ての教師が、より魅力ある授業を実現していくために、より積極的に授業を参観し合い、意見交換をして高め合う校内研修を目指していきましょう。

#### (1) 付けたい力に照らして子どもの姿で語る

「あれ？」と疑問をつぶやく子。「ようし、やってみよう」と目を輝かせて動き出す子。「なぜだろう？そうか、それなら……」と黙々と追究する子。

多くの学校で、子どもが学びの過程で表すよさや可能性を大切にされた授業が展開されています。事後研修では、学びの実感を積み重ねる子どもの姿を捉え、「Aさんのあの発言を引き出した先生の声掛けが、よかった。」「Bさんのあの質問から、話し合いが深まった。」等々、子どもの姿で語る研修が見られるようになってきています。

しかし、どの子どもにも学習指導要領に示されている内容を確実に身に付けさせ「確かな学力」を育むためには、本単元（題材）や本時で付けたい力が、学習指導要領や解説に示されたどの目標や内容につながっているかを事前に確認し、押さえる必要があります。

事後にはそれらを踏まえて、「本時で付けたい力が子どもに身に付いたか」「教師がとった～という手だては、付けたい力を身に付けていく上で有効であったか」「子どもたちは、この1時間で何が分かり、何が分からないのかを振り返り、自己評価できていたか」等、付けたい力に照らして子どもの姿で語り合うことが求められます。

#### 付けたい力の明確化

指導主事による学校訪問によれば、小学校では付けたい力（本時の目標）の押さえが必ずしも十分であるとは思われな  
ない。そのため、授業ごとに付けたい力を明確にして、それに基づいた手だてを講じることが大切である。その際、「聞き合  
う、話し合う」ことは、思考力・判断力・表現力等を育成するための手だてとなる「言語活動」の一つに過ぎないことを  
踏まえ、習得、活用それぞれの場面に適した手だてを講じ、学びの実感や振り返りを大切にすることが重要である。

平成 25 年 3 月 静岡県学力検証委員会 学力検証委員会報告書  
第Ⅱ部「確かな学力」の育成に向けた提言より

## 「付けたい力」を大切にするS小学校

### 背景

S小学校では、「一人1研究授業」を目標に校内研修の充実に努めています。これまで行ってきた研究授業の事後研修で、活発な意見交換が行われていましたが、研修主任のN先生は、協議の中身に物足りなさを感じていました。子どもの表れを基に本時の目標に迫ることができたかどうかを検証しているものの、突き詰めた協議に至らずに終わってしまうことが多かったからです。

N先生は、その原因を分析する中で、「本時の目標（付けたい力）が適切であったか？」「教師の付けたい力の捉えが曖昧だから、協議の論点が定まらないのではないか？」等の疑問を持ちました。そこで、「単元や本時の目標（付けたい力）を明らかにし、全員で共有すること」に絞り、事前研修の段階から学習指導要領の記載内容を基に十分な議論を重ねることにしました。そして、「付けたい力」を共通理解した上で授業を参観し、事後研修に臨むことができれば、協議がこれまでよりも深まるのではないかと考えました。そうした経緯から、2学期より「付けたい力を押さえる」ことを重視した事前研修をスタートさせました。

### 実践

#### 1 事前研修

今回の研究授業は、教職5年目のU先生が、第1学年の算数「ひきざん(2)」の単元で行うことになりました。これまで行ってきた事前研修では、初めに授業者から学習指導案が提案され、それに基づいて協議を行ってききましたが、今回は学習指導案を作成する前に、次のような流れで行うことにしました。

- ① 当該学年の指導経験のない教員もいるため、まず初めに、第1学年「ひきざん(2)」の単元で、どのような学習が行われるのか、全員で教科書の記載内容を確認する。
- ② ①で、学習内容が理解できたら、次に、本単元で「付けたい力」は何かを押さえるために、小学校学習指導要領解説算数編の該当ページを全員で熟読する。
- ③ ②における個人の考えを基に、「ひきざん(2)」の単元における「付けたい力」を小グループで意見交換する。その後、全体場で意見を共有する。

第1学年の減法の学習で「付けたい力」について、小学校学習指導要領の算数「A(2)加法、減法」に次のような記述があります。

- (2) 加法及び減法の意味について理解し、それらを用いることができるようにする。
  - ア 加法及び減法が用いられる場合について知ること。
  - イ 1位数と1位数との加法及びその逆の減法の計算の仕方を考え、それらの計算が確実にできること。
  - ウ 簡単な場合について、2位数などの加法及び減法の計算の仕方を考えること。

しかし、これらは第1学年で学習する加法及び減法全般について述べたものであり、この全てが「ひきざん(2)」の単元に当てはまるわけではありません。「ひきざん(2)」の単元で付けたい力を明らかにするためには、学習指導要領が求めているA(2)のアイウの項目がどんなことを意味しているのかを熟考する必要があります。前述③の意見交換の場では次のようなやりとりが行われました。

N先生：「ア、イ、ウの三つがあるけど、今回の単元ではその全部を目指す必要はないと思いますが、いかがでしょうか？」

T先生：「アについては、例えば、『ケーキが5個あって、3個食べると残りは何個でしょうか。』というときに、これが引き算になることが分かることが大切っていうことですよ。つまり、加法や減法が用いられる場合を理解する学習は、1学期に行う『たしざん(1)』や『ひきざん(1)』の単元で最も大切にしたことだと思います。」

N先生：「そうですね。ということは、今回の学習で付けたい力はイカウになりそうですが、イとウにはどんな違いがあると思いますか？」

Y先生：「イは『計算の仕方を考え、それらの計算が確実にできること』、ウは『計算の仕方を考えること』と書かれています。付けたい力に違いがあるような気がします。」

S先生：「どちらも計算の仕方を考えることが大事だということは分かりますが、イは、計算が確実にできることも求められています。」

N先生：「ちなみに、イの『1位数と1位数の加法及びその逆の減法』は、具体的にどんな数の計算を意味しているのでしょうか？また、ウの『簡単な場合の2位数』とは、具体的にどんな数の計算を意味しているのでしょうか？学習指導要領の解説をじっくり読み込んでみましょう。」

⋮

このようなやりとりを経て、イの「1位数と1位数の加法及びその逆の減法」とは、和が10以下の加法及びその逆の減法と、和が10より大きい数になる加法及びその逆の減法（2位数－1位数）に分けて考える必要があり、今回は後者の計算がメインになることが確認されました。また、計算の仕方を考え、説明する力を付けること、計算方法の意味理解を深めること、そのために個々の考え方を可視化し、比較検討する学習活動を設定することなどについても、教師間で共有されました。

## 先生方の声

- 学習指導要領を基に「付けたい力」を自分一人で考えることは、意外に難しく自信が持てないと思いました。自分が研究授業を実施するときには、今回の研修を参考にし、他の先生方にも御意見をいただき、検討していきたいと思います。（20代女性教諭）
- 「付けたい力」が明確になることで、それに迫るための効果的な手だてを考えることができそうです。また、「付けたい力」に基づいた評価規準も設定することができ、適切に評価することができそうだと感じました。（30代男性教諭）

U先生は、事前研修や学年研修での協議を基に指導案を作成し、授業に臨みました。

－授業の概要－

○ 本時の目標

ブロック操作をしながら説明し合う活動を通して、繰り下がりのある引き算では、10のまとまりに着目して計算の仕方を考えることができる。【数学的な考え方】

○ U先生の思い

ガムが12こあります。ともだちに9こあげると、のこりはなんこになるでしょうか。

この課題について2色のブロックを操作する活動を手だてとし、計算の仕方を考えさせたい。子どもたちは10個の黄色ブロックと2個の赤色ブロックを用いて $12-9$ の操作をする。始めに赤ブロックを2個あげて、その後でまとまった10個の黄色ブロックから7個あげると、残ったブロックは、「黄・黄・黄」となる(減々法)。一方、まとまった10個のブロックから9個あげると残りは「黄・赤・赤」となる(減加法)。その「残りのブロック」に視点を当て、答えは同じ「3」でも、その答えの導き方は一通りではないことを押さえたい。

○ 子どもの問い

「答えは同じなのに、どうして残ったブロックの色がちがうのかな。」

## 2 事後研修

授業では、U先生の考えていたとおり、子どもたちは、「おかしいな」「なんで色が違うのかな」と問いを持ち、意欲的に追究していきました。

授業後の全体研修では、目標に迫りきれなかった子どもに対して、どのような手だてが必要であったかについて協議が深められました。

T先生：「残ったブロックの色が友達と違っていることに「あれ？どうして？」という子どもの「？」が生まれたね。本時の目標に迫るよい学習問題だったと思ったけど、そこから、一部の子どもたちは、うまく自分の考え方を表現するまでには至らなかったですね。」

M先生：「Aさんは黄・赤・赤、隣の席のBさんは、黄・黄・黄でした。二人は、どう考えてブロックを動かしていたのか、リアルタイムでその子たちの思考をどうしたら表現させられたのかな。」



K先生：「発表したAさんが板書にあったブロックの絵で説明している時に、矢印とか数式とかを先生が補助的に加えて、目に見える形で残すっていうのはどうでしょう。つぶやきを見える化するイメージで。」

T先生：「それって大事だと思う。考えたことを式や絵で表すことは分かりやすさを大切にした算数的活動ですものね。それに、“まず始めに10のまとま

りから9あげます。次にあまった1と、ばらの2を足して…」と言葉で説明できるように、教師はモデルを示すなどして支援する必要があったかもしれないね。」

U先生：「黄色ブロックから全て取ったAさん、赤色ブロックから取ったBさん、その子が最初にとったブロックの色に着目して考えさせる…動かしたブロックや式をその子の言葉で説明させる…時間はかかるけど、 $12-9$ の意味理解のためには、欠かせないですね。」



### 先生方の声

○これまでの授業では、得てして「子どもたちが活発に話し合っていれば、それでよしとする」ケースが多かったと思います。今回の授業のように、最終的にそれぞれの子どもが学習問題に対する答えを持てるようにするためには、付けたい力を明確にして、授業の最終での子どもの姿をイメージして、そこに向かって展開することが大事なんですね。 (40代男性教諭)

○子どもの「あれ?なんで?」という問いを引き出す発問でしたね。この問題を解決したいと思った子どもは「計算の仕方」に目を向けることができました。つまり、付けたい力に結び付く学習活動や思考ができたわけです。改めて、学習指導要領を具現化する授業の必要性について考えさせられた研修でした。 (50代女性教諭)

### ここがポイント!

#### ◎ 付けたい力を的確に押さえる事前研修

S小学校では、校内研修の充実を図るために、事前研修において、学習指導要領を基に付けたい力を的確に押さえることを目的とした協議がなされています。付けたい力を明確にすることが、効果的な手だてを講じることや適切に評価することにつながります。

#### ◎ 付けたい力に沿って、子どもの姿で語る事後研修

事後研修において、本時で目指す子どもの姿を明確にした上で協議がなされています。研究授業における子どもの学びの事実から明らかになった課題は、協議に参加した全職員の明日からの授業改善のヒントとなっています。

## (2) 研修を工夫し、活性化させる

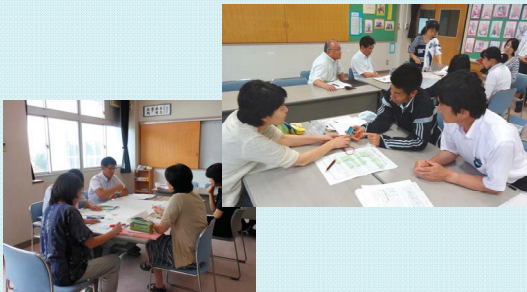
校内研修では、一人一人の教師が、研修内容について「明日の授業づくりのヒントが得られた。」「子どもを見取る方法や有効な手だてを知ることができた。」「研修を積み重ねることで、授業のことを周りの先生に相談しやすくなった。」等、手応えを感じられるようにすることが大切です。

授業研究においては、一人一人の教師が主体的に協議に参加しましょう。そうすることで授業者だけでなく、参加した教師それぞれが、自身の授業改善へつながる手だてを見付けたり、職員同士の研修に対するコミュニケーションが図りやすくなったりします。さらに、教師の手だてについてそのよさだけでなく、課題や改善点等を語り合うことで、校内研修の意義をより強く感じることができます。

既に取り入れている学校もありますが、例えば、どの教師も発言しやすくなるよう年代ごとにグループをつくって話し合ったり、一人一人が付箋紙に考えを書き、それらをグループ内で整理することで、成果と課題を可視化したりするなど、研修方法を工夫することで、より効果的な研修を行うことができます。

さらに、授業研究だけでなく、同僚性\*を生かしたOJT\*を取り入れていくことも、校内研修を活性化させたり、互いの指導力を向上させたりする上で有効です。例えばメンターチーム\*を組織し、若手教師が普段悩んでいることや指導で困っていることなどを語り合ったり、先輩教師から指導方法等を学んだりする機会を計画的につくっていくことも有効な手だての一つです。

同僚性を発揮し、研修を深める  
O中学校「グループ協議」の様子



若手教師の授業づくりを支える  
K小学校「模擬授業」の様子



### \*OJT(On the Job Training)

企業等における能力開発技法の一つで、「日常的な業務を通して、必要な知識や技能、意欲、態度等を意図的、計画的に高めていく取組」のことをいいます。

これを、学校での研修に置き換えると、「日常の実践の中で、授業力や研修に臨む意識・姿勢等を高めるとともに、校内研修と自己研修をつなぐよう、教職員が専門的な分野や得意分野で互いに力を発揮しながら継続的に研修に取り組むこと」ということができます。(『よりよい自分をつくっていくためにⅢ』 P9)

### \*メンターチーム

複数の先輩教員(メンター)が複数の経験の浅い教員(メンティ)をメンタリングすることで相互の人材育成を図るシステムをいいます。メンタリングとは、メンターがメンティと継続的、定期的に交流して信頼関係をつくりながら、メンティの仕事や諸活動を支援し、精神的、人間的成長を支援することを言います。(P45 事例参照)

### \*同僚性

同僚性とは、「支え合う、同僚との関係」「学び合う、同僚との関係」のことをいいます。授業をはじめとする学校の教育活動の質を高めていくためには、同僚性の質を高め、発揮していくことが必要です。



## 研修の視点を共有し合うY幼稚園

### 背景

Y幼稚園では、年度初めに研修の視点を先生方全員で確認します。前年度末の研修において、自園の子どもたちの実態を踏まえ、子どもたちに付けたい力を設定しました。今年度の付けたい力のキーワードは、「言葉の獲得」です。

前年度の段階で付けたい力は決まっていたものの、そのキーワードに関して、それぞれの先生の捉え方が異なります。また、今年度異動してきた先生方もいるため、研修の視点を確認する必要があります。そこで、「言葉の獲得」の捉え方を共有するために、次のような手だてを講じました。

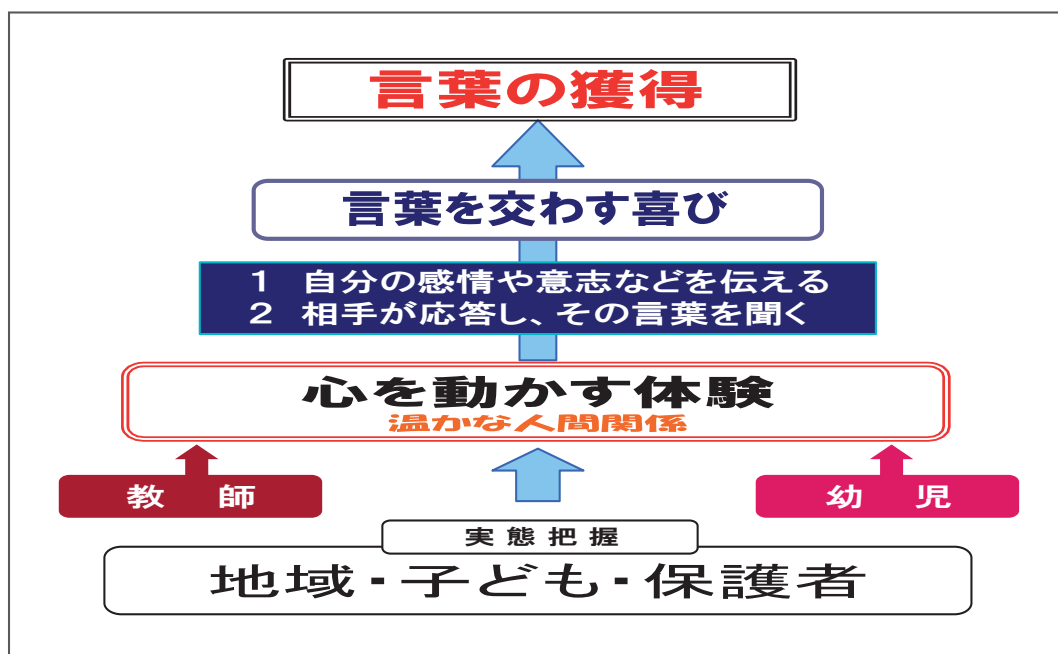
### 実践

#### 1 共有の手だて

「幼稚園教育要領解説」を基に、「言葉の獲得」について図式化する

はじめに、教育要領解説の中に、研修のキーワードである「言葉の獲得」がどのように位置付けられているかを確認しました。

解説の内容を全員で押さえた後、子どもや地域、保護者の実態を踏まえながら、先生方一人一人が、子どもが言葉を獲得していく過程を図式化しました。その上で、個々の図を基に全員で話し合い、園全体で、一つの図にまとめていくことで、「言葉の獲得」について共通理解を図りました。



### ここがポイント！

- ◎ 図式化の作業を通して、先生方それぞれがキーワードについて考えを深めている教育要領解説の中の言葉やその言葉を基にしたイメージ図を与えられただけでは、

自分のこととして捉えられず、日々の保育にはつながりません。一人一人が、付けた力（「言葉の獲得」）に関する自分の捉えを明確にした上で、子どもたちが言葉を獲得していく道筋を具体化することが大切です。

Y幼稚園の先生方は、子どもたちに付きたい力「言葉の獲得」を共通理解した上で、保育環境を構成し、子どもたちの成長を促していきました。

## 2 「言葉の獲得」に向けて

### (1) ごっこ遊びから言葉を交わす喜びを味わう（年中組）

年中組のM先生は、子どもたちが大好きな劇ごっこを通して、言葉の獲得を図ろうと考えました。題材には、読み聞かせで子どもたちに特に人気のある絵本を取り上げることにしました。M先生は、繰り返し読み聞かせを行うことで、子どもたちの登場人物や生き物、風景などに対するイメージを膨らませていきました。こうした取組により、言葉に関する感覚が徐々に培われていき、劇ごっこにおける台詞づくりやオノマトペ（擬音語や擬態語）として表現することにつながりました。

劇ごっこでは、M先生と他の先生方がアイデアを互いに出し合い、子どもたちが遊びを楽しむことを通して言葉を獲得する保育環境を創造していきました。

### (2) 言葉集めから歌作りを楽しむ（年長組）

年長組を担当するA先生は、子どもたちが言葉を獲得する手だてとして、子どもたちが楽しみながら歌を作る遊びに挑戦しました。

A先生は、歌作りを通して、自分の思いを込めた言葉を声に出すことができるようになってほしいと考えました。

以前から『ブレーメンの音楽隊』を劇にしようと取り組んでいた子どもたちは、自分が一番関心を持っている登場人物や動物から連想される言葉を集め、それらの言葉に「ふし」を付けて劇中に取り入れることを計画しました。

[ロバグループが集めたロバに関する言葉]

くびがながい　みみがかわいい　あしがおそい　たてがみがある  
うれしいとしっぽをふる　せなかがふわふわできもちいい

おんどりグループ、どろぼうグループ等、その他のグループもそれぞれ言葉集めをすることができました。これらの言葉に、子どもたちとA先生と一緒にメロディーを付けていきます。A先生は得意のギターを駆使し、子どもたちのメロディー付きの言葉をつないで、一つの曲にしてまとめていきます。自分たちのメロディー付きの言葉が徐々に歌になっていくにつれ、子どもたちは笑顔いっぱいになりました。子どもたちは、協同の遊びの中で楽しみながら言葉を獲得していきました。



## 先生方の声

○最初に教員全員でイメージを共有したことで、本園の保育の方向付けができました。その後、手だてを考えるとにも、ふれずに取り組みました。

(30代女性教諭)

○子どもの心をどれだけ動かせるか、このことが、子どもたちが言葉を獲得していくためにとても大切だと思いました。そのための環境構成をこれからも工夫していきたいと思います。

(20代男性教諭)

## 成 果

保育を行う上で、園としてどのような力を子どもに育んでいくかを全職員が共有することは、その園の教育の方向性を定め、より効果的な保育を展開していく上で重要な鍵となります。

Y幼稚園では、職員の協働作業として、教育要領解説を読み込み、子どもたちに付けた力を共通理解していたため、具体的な子どもの姿をイメージしながら保育を展開することができました。工夫された環境構成のもと、言葉を交わしたくなるような体験を積み重ね、言葉を交わす喜びを味わった子どもたちは、人に伝わる言葉や場に応じた言葉を着実に獲得していったのです。



# 学校の特色を生かして校内研修の充実を目指すH小学校

## 背景

H小学校は、学級数 11、教員数 14 人の学校です。研究主題「自分のよさを発揮し、共に高め合う子の育成」を目指し、各教師が教科を選択して研究授業を行う校内研修に取り組んできました。しかし、校内研修には以下の課題がありました。

- ・学級数減に伴う教師数の減少の中で、どのように校内研修を活性化させるか。
- ・若手教師の割合が高くなる中で、教師の授業力をどのように向上させるか。
- ・教師の多忙化の中で、限られた校内研修の時間をどのように充実させるか。

これらの課題を解決していくために、次のような重点を置いて研修に取り組みました。

- ① 教師の人数が少ないことを生かして効果的な校内研修を計画する。
- ② 協議の視点を明確にし、全員参加型の事後研修（協議会）を実践する。
- ③ 研修主任がコーディネーターとなって、校内研修をつなぐ。

## 実践

### 1 教師の人数が少ないことを生かして効果的な校内研修を計画する

ベテランから若手まで、一人1研究授業を年間計画に位置付けました。本年度は、5月の研修主任による提案授業に始まり、11月までの6か月間に12回実施しました。一人1研究授業の実施は、人数が少ない学校ならではの強みです。

年間12回の研究授業は、事前研修－研究授業－事後研修のサイクルで実践することを基本としています。しかし、校内研修の実施に当たっては、時間的・人的な制約があります。そこで、12回を全員で行う大研究5回と、各学年団（低・中・高学年（特支））で行う小研究7回とに分けました。小研究では事後研修を行わない代わりに、参観者が授業研究の視点に沿った意見・感想等を「参観メモ」に記入し、授業者に伝えています。

【研究授業計画】 ※★大研究 ☆小研究

月	形態	研修内容
5	★	3-1 国語（研修主任）
6	☆	特支 算数（A教諭）
	★	6-1 社会（B教諭）
	☆	5-1 外国語活動（C教諭）
9	★	4-2 社会（D教諭）
10	☆	4-1 国語（E教諭）
	☆	2-1 算数（F教諭）
	☆	2-2 算数（G教諭）
	☆	特支 生活単元（H教諭）
11	★	1-2 音楽（I教諭）
	★	6-1 家庭科（J教諭）
	☆	1-1 生活科（K教諭）

### 2 協議の視点を明確にし、全員参加型の協議会を実践する

H小学校では、可能な範囲で養護教諭や事務職員も授業後の協議に参加しています。養護教諭や事務職員からは、教科指導とは別の観点からの意見を聞くことができます。

KJ法や指導案拡大シートなどを活用して、ワークショップ型の協議を取り入れると、全員が協議に参加しやすくなるとともに、話し合いが活性化し、深まります。様々な方法を試してきましたが、協議の





また、研修部報の作成・配布は、参観者が授業の実践内容から考えた自身の課題や研修全体の方向性を全員で共有していくことにつながります。研修主任が一つ一つの研究授業をコーディネートしていくことで、小研究では、授業者と参観者、大研究では、授業者と職員全員、そして一回一回の研修をつなぐ役割を果たしているのです。

これらの取組は、全ての研究授業において実践しています。

## 成果

### ○ 校内研修の活性化と深化

限られた研修の時間を、ワークショップ型の協議や参観カード、授業の振り返りシート、研修部報等を活用することで、授業改善の視点がより明確になり、協議も活性化しました。また、人と人、研修と研修につながり、校内研修がより深化していることに手応えを感じています。

### ○ 支え合う職員集団の形成

全員授業、全員参加の校内研修を組織したことで、職員間のコミュニケーションがより深まっています。このことは、若手教師の安心と授業力向上につながるだけでなく、職員が全員で支え合い、子ども一人一人の成長を見守っていく学校体制づくりにもつながっています。

## 先生方の声

○授業後の協議会、先輩の先生方の授業参観、部報を読むことで「なるほど!」「次はこうしてみよう」と思います。新たなことに気づき、実践意欲も高まります。

(20代女性教諭)

○研究授業の振り返りシートを書くことは、自分の実践を整理することになり、日々のよりよい授業づくりにつながっていると感じています。

(30代男性教諭)

○職員の研修意欲の高まりが、子どもたちの学ぶ意欲の高まりにつながっている。授業に臨む前向きな姿勢が、子どもにも伝わっていると思う。

(40代男性教諭)

## ここがポイント!

### ◎ 点を線でつなげる

研修主任だけでなく、授業者や参観者全員が研究授業について成果や課題、学んだ点、今後に生かしたい視点等を発信し、共有することで、一つ一つの研究授業を教科や学年を超えてつなげています。このような取組は、教師の研修に対する主体性を引き出しています。

### ◎ 学校の特徴を強みとして生かす

H小学校では、教師数の減少や若手教師の増加、教師の多忙化といった学校の現状をしっかりと踏まえ、校内研修の充実に努め、成果を上げています。まさに「学校の特徴を強みとして生かしている」取組であると言えます。

## 【研修部報】※一部抜粋

☆10/25 1の2 音楽科 「おとあそび」  
 <参観メモより/視点について>  
 ◎表したいイメージを言葉で表現したり、話し合ったりする活動は有効だった。  
 ◎言葉で表現したことと楽器の鳴らし方があっていない班があった。  
 ◎1年生で話し合い活動が成立しているのが素晴らしい。  
 ◎話し合う、考える手がかりが示してあったのがよかった。  
 ◎話し合いの目的がはっきりしていたのでよかった。  
 ◎掲示された言葉を見ながら楽器を鳴らそうとしていたのでグループ活動には効果があった。  
 ◎掲示された言葉、キーワードが多くて理解しづらい子もいたのではないかな。

<授業で実践! 音楽から〜つなごう・深めよう・生かそう〜>  
 [1年担任として]  
 グループ活動の支援は教師のより適切な声かけて変わってくると思うので、生活科でもねらい、目的をはっきりさせ適切な支援をしたい。<意欲>  
 [2年国語で]  
 「お手紙」の気持ちを表す音読の方法。「こうやって読みたい」→「こう表現する」<自分の思いを表現→説明>  
 [体育主任として]  
 体育の表現活動で「グループで話し合い」「創作ダンスを発表し合う」活動を行い、「説明する」力、「ほかの人の意見との調整力」などを鍛えたい。<説明>  
 [4年担任として]  
 「子どもを引き込む」「楽しい、知りたい、もっとやりたい」という気持ちで学習に取り組む事ができる魅力ある授業をしたい。子どもを驚かせるような教材研究をがんばりたい。<授業力>  
 [フリーとして]  
 この授業のわらいは何か、子どもたちに付けたい力は何かをどんな授業でもしっかりおさえたい。<授業力>  
 ○○さん、1年2組の子どもたち、すばらしい授業をありがとうございました。参観した皆さまが多くのことを学びました。校内研修として大変ありがとうございました。

## 参観者が考えた自身の実践課題

## 職員をつなぎ、研修の日常化を目指すT中学校

### 背景

T中学校は、25学級の大規模校です。研修テーマ「自ら学びを見付ける生徒の育成」に向けて、自己の思いや考えを「伝え合い、高め合う授業」づくりに取り組んでいます。しかし、職員数も45名と多く、年齢層も様々であることや、専門教科以外の授業に対して意見を言うことを遠慮してしまう等の実態があります。そのため、研修を進めるに当たっては、「目指す授業について、全職員が共有することが必要であり、それをどのように実現していくか」が課題と考えました。

そこで、組織全体で授業改善に向けて意識を高め、個々の授業力向上をねらい、以下の3点を重点にした校内研修を実践しました。

- ① 目指す授業「伝え合い、高め合う授業」に対する共通のイメージを持つための取組
- ② 教科の枠・年齢層を超えた研修グループの設定
- ③ 目指す授業を意識して、日々実践できるようにするための取組

### 実践

#### 1 「伝え合い、高め合う授業」に対する共通のイメージを持つための取組

「伝え合い、高め合う授業」を達成させるためには、「心を込めて聴く・話す」姿勢が子どもたちに根付いていくことが大切であると考えました。

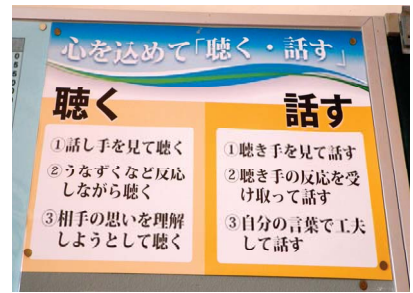
そこで、学校全体で「伝え合い、高め合う授業」を創造するために、「聴くこと・話すこと」を切り口とした研修内容を充実させていくことにしました。それには、まず、全員が「心を込めて聴く・話す」大切さを共通理解して指導していくことが重要です。校内研修では、必ず協議に入る前に「フリートーキング」の時間を設定し、「心を込めて聴く・話す」ことについて、子どもたちの現在の表れや、個々の指導の状況を教師同士が伝え合い、指導の効果や今後の方向性について確認しました。

夏休みには、外部講師を招き、「なぜ、聴くこと・話すことが大切なのか」をテーマにした研修を行いました。子どもの「なぜだろう」を引き出す学習課題の工夫が、主体的に聴く子どもを育てる手だての一つになることや、各教科における言語活動の充実のポイントについて、講義・演習を通して学び合いました。そして、「主体的な聴き手を育てることが、主体的な話し手を育てる」ことを、教師全員が共通理解しました。

また、全教室にはポスターを掲示し、子どもたちが、常に「心を込めて聴く・話す」ことを意識できるようにしました。



こうした取組から、「心を込めて聴く・話す」ことを意識した授業の在り方について、普段から自己の授業を振り返ったり、職員室内で互いの授業について積極的に意見が交わされたりするようになり、全ての教師が同じ方向を向き、授業づくりを柱として教育活動に当たっていきこうとする意思統一が図られていきました。「聴くことは、分かる・できるの第一歩」というキャッチフレーズも生まれ、子どもたちの中にも「心を込めて聴く・話す」ことが浸透していきました。



—夏休みの校内研修の感想より—

「聴く・話す」に取り組みながらも、実はこれでいいのかな？と不安になりながらやっていました。でも、今日のお話で、少しずつですがステップアップしていることを実感し、なぜこの「聴く・話す」に取り組むのか、その価値を改めて感じることができました。

## 2 教科の枠・年齢層を超えた研修グループの設定

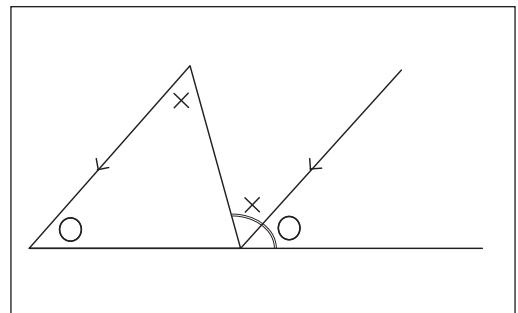
教師同士が、それぞれの力を引き出し、さらに伸びていくために、年代・性別・担当教科・所属学年等に考慮して研修のグループを編成し、誰もが自由に発言できる参加型の研修方法を取り入れました。

また、グループ協議では、輪番制で司会を担当し、ベテラン教師も若手教師も主体的に参加できる方法を取り入れました。

グループ協議で語られるベテラン教師の授業の分析の仕方は、若手職員にとって、貴重な学びになります。本時のねらいと学習問題とのつながり、授業の基本的な技術に対する批評等、ベテラン教師の実体験に基づいた発言は、説得力と重みがあり、若手教師にとって授業をつくる上でのヒントとなる内容がたくさん含まれています。逆に、若手教師のエネルギーで発想豊かな授業は、ベテラン教師にとって、よい刺激になり、マンネリ化しがちな授業の在り方を振り返る機会になりました。

11月に行われた数学の研究授業における事後協議では、子どもたちの「心を込めて聴く・話す」に視点を当てながら、子どもたちが目標に迫ることができていたかについて協議を行いました。

今回の授業は、「錯角」「同位角」などの考え方をもとに、角の性質を利用して平行線の外側にある三角形の角度を求めることが課題です。参加者は、子どもたちがこの課題解決に向かってどのように聴き合い、伝え合っていたか、じっくりと観察しました。子どもたちは、前時までに学習した「錯角」「同位角」などの用語を使い、考えたことをグループの友達に説明します。自分の考えを説明したり、互いに疑問を出し合ったりする中で、学習内容の理解が深まるとともに、数学的な思考力や表現力を伸ばすことにつながっていると思われました。この姿は、「仲間の発言や関わりによって学びを深める」姿であり、T中学校が目指す「学び





を発見した生徒の姿」として捉えることができました。

協議では、授業の中で見取った子どもたちの話合いの内容を分析しました。子どもたちの「聴く・話す」の定着度とその効果を確認しながら、目標に迫っていく子どもの姿について協議を深めていきました。



#### —事後協議より—

A先生：「K君が説明していたグループでは、K君が、『この線は平行線だから、こことここが錯角で等しくなるよね。ここまで、わかる？で、今、ぼくたちが求めたいのはこの角度でしょ。同位角も等しいから、こことこの角度も同じってことになると思うよ・・・。』と説明していた。相手の反応を見て話すこともできていたし、自分の言葉で考えたことを既習内容を使いながら筋道立てて伝えることができている姿は、ねらいに迫っている姿だと言えると思うな。」

B先生：「聴く側も、ただ聴いているだけではなくて、『それってこういうこと？』と、説明を自分の言葉で確かめていたところもすばらしかった。Jさんは確かめたことを今度は自分の言葉で説明したり、ノートに書いたりしていた。その内容から、Jさんはねらいが達成できたと思う。今までの「聴く・話す」取組の積み重ねが出ているね。」

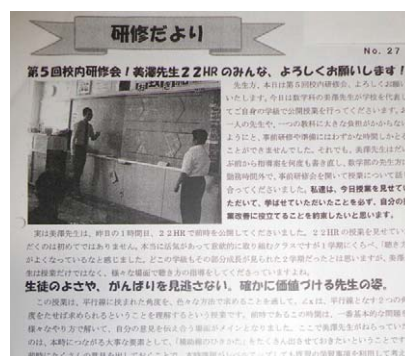
### 3 目指す授業を意識して、日々実践できるようにするための取組（研修だより・授業参観週間）

研修主任は、研修テーマに関連させながら各研究授業の子どもたちの姿や事後研修の様子などを、「たより」としてまとめました。写真も入れて各回の様子を思い出せるように工夫し、授業研究から学んだことや今後の実践につながる取組等のポイントを掲載しました。

また、授業者のちょっとした努力や工夫も見逃さずに記事にしています。

この「たより」の内容をもとに、職員室内で、ベテランと若手の教師が授業について話し合う姿も見られました。月に一度の校内研修という場でなくても、日々の実践をもとに教師同士が気軽に語り合うことが、授業改善への意識を高め、目標を共有し、目指す授業に近づくための有効な手だてになっていると言えます。

また、学期に一度「授業参観週間」を設定し、自由に互いの授業を見せ合う時間を設定しました。授業における子どもたちの「心をこめて聴く・話す」姿を視点到参観し、子どもたちの成長を確認するとともに、自身の授業づくりに生かせるヒントを見つけようと真剣に参観する教師の姿が見られました。



## 成 果

- 「聴く・話す」というどの教科にも通じる共通の土台を基にして研修を進めることによって、学校全体で校内研修について共通理解が図られ、「伝え合い、高め合う授業」に対する方向性を揃えることができました。
- ベテラン教師は、今までの経験から感じたことを協議の中で若手に伝えていこうとし、若手教師は、のびのびとアイデアを出して授業実践し、協議の中から学んでいこうとする姿があります。それぞれの立場で研修に積極的に関わり、学校全体に研修の渦を創り上げることができました。
- 教師間で「心を込めて聴く・話す」という指導の方向性を共有し、研修を通して教師自身がその大切さを理解した上で、常に意識して子どもたちに指導していくことで、子どもたちも伝え合い、心が通い合うことの心地よさを感じ取るとともに、学習内容の理解の深まりや学ぶ意欲の高まりを感じることができました。

### 先生方の声

○教科の枠を超えて、先生方と授業について語る機会が増え、それぞれ先生方が、自分の授業でどんな工夫をしているかということが、具体的に分かって、それを次の日からすぐに自分の実践に結び付けることができました。職員全員が、どこに向かっているのかが、わかりやすいです。

(20代男性教諭)

○他教科の先生方の指摘は、「目から鱗が落ちる」ことが多かったです。教科の枠だけに留まっていたでは気付くことができなかつたことがたくさんありました。

(30代男性教諭)

### ここがポイント！

#### ◎ 共通の切り口を見付け、全職員で主体的に取り組む研修

「心を込めて聴く・話す」ことを切り口に、その必要性や目指す子どもの姿を全職員で共通理解し、職員一人一人が主体的に授業改善に取り組む研修の実践があります。

また、研修主任が中心となり、各授業研究での教師の取組のよさを価値付けたり、成果を全体に返したりすることで、研修が積み重ねられています。

# 「チーム英語科」で授業改善に取り組むN高等学校

## 背景

N高等学校では約10年前から、授業用教材や資料等を学校サーバーに保存することにより、教員間の情報を効率よく的確に共有する取組を行っています。

こうした状況にあって、平成25年度の文部科学省委託事業「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」における拠点校の指定を受けました。これにより、以下の課題解決に向けて、「チーム英語科」として取り組んでいます。

- ・新学習指導要領実施に伴う変革への対応
- ・「授業は英語で行うことを基本とする」ことに対応した指導法の開発 等

## 実践

### 1 4技能を育成する活動

コミュニケーション能力と論理的思考力を強化する指導として、授業で行うコミュニケーション活動の充実を図っています。教科書の單元ごとに、学年担当者が輪番で共通プリントを作成し、授業集団により指導内容に差がでないよう、学年担当者全員が共通プリントに沿って4技能を総合的に育成する指導を行っています。主な活動は以下のとおりです。

#### 【帯活動】Mission in Talking (毎時間、10分間程度を利用して行う継続的な活動)

身近な話題に関する会話の基本的なパターンと、相手の発言にあいづちを打ったり、要点を繰り返して内容を確認したりする等のコミュニケーションスキルをしっかりと身に付け、一つのテーマで一定時間、会話を続けることができる力を育成することを目的としています。

#### 【内容理解】Reading Comprehension

教科書本文の特徴に合わせた表や図式、フローチャート等を用いて、英語による学習内容理解を促しています。また、それらを用いて、学習した内容を自分の言葉で表現する活動も行います。

#### 【コミュニケーション活動】Goal Activity

単元目標を具現化する活動として、各単元の最後に、単元で学んだことを活用するコミュニケーション活動を設定しています。インタビューやスキットづくり、スピーチやプレゼンテーション等を行いました。

### 2 毎週定例の教科会議

教科会議を原則として毎週実施しています。主に新学習指導要領に対応した指導を行う上での学年間の情報共有、各種教科研修会の報告及び各教員・学年での実践報告を行っています。

●Mission in Talking!

Mission in Talking! Let's talk about your feeling!

①毎朝決められた時間で、英語で話せるかを記録する。  
②パートナーにこのカードを渡し、①以外の項目のチェックを  
③3文以上で表現できる。 ④1～2文で表現  
⑤1つの項目で複数1文を表現できる。例1冊: En - 1冊  
⑥全てのマスが④で埋まるよう頑張ろう!  
⑦会話相手は黙って聞かずに聴こうをしよう!  
\* That was great! / Really? / I like that! / Me too!  
\* 相手のキーワードを繰り返そう! / En happy ->

①毎朝決められた時間で、英語で話せるかを記録する。  
②パートナーにこのカードを渡し、①以外の項目のチェックを  
③2文以上で表現できる。 ④1～2文で表現  
⑤2つから考え、その理由を言う。客観的、具体的な理由で。  
⑥どちらが好み、その理由を言う。  
⑦ Which do you like better, dogs or cats?  
A: Dogs. Because I like dogs. X  
B: Cats. Because I like cats. O  
\* 理由が正しく  
\* 理由が正しくない

Mission in Talking! Can you...  
① 毎朝決められた時間で、英語で話せるかを記録する。  
② パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
③ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
④ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑤ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑥ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑦ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑧ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑨ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑩ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑪ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑫ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑬ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑭ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑮ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑯ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑰ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑱ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑲ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
⑳ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉑ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉒ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉓ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉔ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉕ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉖ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉗ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉘ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉙ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉚ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉛ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉜ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉝ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉞ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㉟ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊱ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊲ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊳ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊴ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊵ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊶ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊷ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊸ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊹ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊺ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊻ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊼ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊽ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊾ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。  
㊿ パートナーが①の項目を話し、あなたは英語で答へ、説明する。

1年生:昨夜したこと、  
気に入る話題など  
相手のことを聞き合う

2年生:2つのうちどちら  
がいいか理由を述べ合う

3年生:既習語彙の  
定義を説明し合う

必ず、どのリストか確認してから  
Please find the word from Lesson  
This is from the Lesson 5.5 list.

Lesson 1.2	Lesson 3	Lesson 4
1 朝顔 (朝)	11 みみず (朝)	1 花開かせ (朝)
2 朝顔 (朝)	12 雲 (朝)	2 朝顔 (朝)
3 朝顔 (朝)	13 朝顔 (朝)	3 朝顔 (朝)
4 朝顔 (朝)	14 朝顔 (朝)	4 ストーンヘンジ
5 朝顔 (朝)	15 朝顔 (朝)	5 朝顔 (朝)
6 朝顔 (朝)	16 朝顔 (朝)	6 朝顔 (朝)
7 朝顔 (朝)	17 朝顔 (朝)	7 朝顔 (朝)

平成 25 年度は主に「CAN-DOリスト」による学習到達目標の設定、観点別学習状況の評価、英語による教科指導法、コミュニケーション能力・論理的思考力の強化等の課題について、全員で検討しました。

### 3 学校全体の協力によるスピーキングテストの実施

N高等学校では、各学年において、年1回、定期試験期間中に生徒全員を対象とするスピーキングテストを実施しています。英語科教員全員が試験官となって、1対1の形式で行います。ICプレーヤーに録音することにより、評価基準の統一も図っています。実施に当たっては、生徒の誘導、試験時間割への配慮など学校全体が協力します。

### 4 「CAN-DOリスト」の形式による学習到達目標の設定

平成 24 年度から、「CAN-DOリスト」の形式による学習到達目標の試行版作成に取り掛かり、平成 25 年度は、外部講師等の助言も受けながら記述内容の改善を行いました。4 技能別の記述に加え、コミュニケーション活動の 3 本の幹として「Negotiation の力」、「Presentation の力」、「Debate の力」を提示し、卒業時まで身に付けさせたい英語運用能力を設定しました。

各単元の目標を具現化するコミュニケーション活動 (Goal Activity) は、「CAN-DOリスト」の記述内容を反映させたり、担当教員が共通の目標を持って学習指導を行い、形成的評価を活かしたりできるように、研究を進めています。また、各学年共通の授業用プリントに、「CAN-DOリスト」の記述を到達目標として記載することにより、生徒にも活動に対する目的意識を持たせるようにしています。

学習評価における活用も始めています。定期試験では、4 技能を適切に評価するため、筆記試験において、「CAN-DOリスト」の記述内容を反映した観点別の出題と採点を行っています。

### 5 授業研究

校内や、教科指導力に優れた他校の教員の授業を参観することによって個々の授業研究を深めています。「授業は公開が原則」という考え方が根付いており、文部科学省事業に関連する 3 回の校内授業研究会と 3 回の公開授業研修会（他校の教員も参加）では、英語科教員 9 人全員が毎回授業を公開しました。「CAN-DOリスト」に設定された共通の学習到達目標の達成を目指し、共通プリントによって活動の共有を図りながら、指導においては各授業集団のよさが発揮できるよう、教材研究をさらに工夫して行うようになりました。



## 成 果

#### ○ 学年間での情報共有

- ・それぞれの教員が、効果的な指導法を積極的に取り入れるようになってきました。また、新学習指導要領実施に伴う指導法の開発や改善についても、複数の教員の考え

や意見がすばやく反映されるようになりました。帯活動等に用いる共通プリントの内容も常に改善・改良が進んでいます。

- ・定期試験における観点別得点欄の作成やスピーキングテストの実施等を通して、評価基準・評価方法に関する情報共有をスムーズに行うことができました。

### ○ 生徒の変容・・・コミュニケーションに対する積極的な態度

2学期末の授業評価では、「英語によるコミュニケーション能力が伸びた」と感じる生徒の割合が、全学年で79.8%に達しました。アンケートには、以下のような感想が書かれていました。

- ・「自分の言葉で言い換えるのは難しかったが、発想力や表現力が少し伸びたと思うので本当に良かった」
- ・「上手に説明できなくてもどかしい思いをすることもあったが、相手にきちんと伝わると嬉しかった」
- ・「授業では考えたり、話し合ったりする時間が多く、自分で考え、答えを導き出す力がとてもついたと思う」

## 先生方の声

○プリントを教員間で共有しているため、他の先生から多くのことを勉強させていただいています。「CAN-DO リスト」をもとに3年後の生徒の姿を見据えて、他の先生方と意見を交えながら、学習指導計画を作成していきたいと思います。

(20代女性教諭)

○複数の生徒から、「皆の前での発表等をもっとやりたい」、「英語を書くのは元々好きなので、話したり聞いたりすることを得意にしたい」などのうれしい感想が得られました。

(20代女性教諭)

○限られた時間の中で、内容理解活動とコミュニケーション活動の両方を確実に行うことは難しかったが、教科書本文の扱いに軽重を付け、教える内容の「幹」を意識して指導内容の取捨選択をするなどの工夫をするようになりました。

(30代男性教諭)

## ここがポイント！

### ◎ 「チーム英語科」で戦略的に行う指導改善

N高校では、学年担当者全員が共通プリントに沿って授業を行います。授業集団の特性に合わせてそれぞれ工夫した指導を展開します。生徒に付けたい力とその評価方法を共有することで、教師自身の個性を生かした主体的な指導を、自信を持って行っています。

また、それぞれの指導の実際についても、情報共有をし、意見交換をすることにより、個々の教材観や指導観等が進化し、更なる指導改善につながっています。

# P D C Aサイクルを効果的に活用した授業研究を目指す A 特別支援学校

## 背 景

A特別支援学校における校内研修については、以下のような課題があげられます。

- ・小学部・中学部・高等部・訪問教育部と複数の学部や学習グループがある。児童生徒の障害の状態も多岐に渡り、実態の幅が広く、個々の課題や願う将来像も多様化・個別化している。そのため、研修テーマの設定や取組への共通理解を深めにくい。
- ・教職員の人数が多く、年齢や本校在籍年数が様々であり経験の幅が広い。よって、T Tを基本とした授業づくりや授業実践での、積極的な意見交換や共通理解を深めるための校内研修の在り方の工夫が必要である。

そのような中、A特別支援学校では、全体研修テーマ「考えて行動する力を育てる授業」を踏まえて、小学部・中学部・高等部・訪問教育部ごとの研修テーマを設定し、実践力を磨くための授業研究を中心とした校内研修に取り組んでいます。

さらに、100人以上の教職員が共通理解・共通認識を持てるための工夫や、P D C Aサイクルを用いた授業研究をさらに効果的に機能させる取組を行っています。

## 実 践

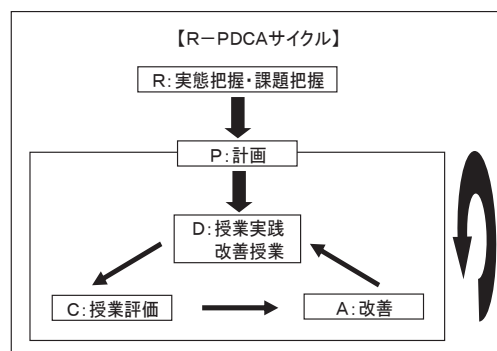
### 1 研修テーマ設定と目指す授業像の共通理解

研修テーマ設定に当たっては、学校目標・学部目標との関係を図表にすることで明確化しました。さらに職員室に研修テーマを掲示することで、意識化を図りました。

研修テーマの解釈や目指す授業像とそのための取組等については、アンケート形式で教職員個々に考える機会を持たせ、それを経験・年齢別（教職経験、障害種別の経験、本校在籍年数・年齢等）に共通点や相違点に着目して集計しました。集計結果から研修テーマに基づいた児童生徒の願う姿や目指す授業像を具体的なイメージになるまで話し合うことで、共通理解を深めるようにしました。

### 2 R-P D C Aサイクルに基づいた授業づくり、授業改善

これまで行ってきたP D C Aサイクルに基づいた授業づくりをさらに機能させるために、P（計画）の前のR（リサーチ…実態把握・課題把握）の必要性があると考えました。サイクルにRを位置付けR-P D C Aサイクルとし、児童生徒の実態把握を深め、実態と授業のつながりをより意識した授業づくりを行いました。Rでは、行動観察や障害特性、目指す将来像に加え、I C F\*（国際生活機能分類）や発達アセスメント等の指標も用いることで、実態把握・課題把握や評価の妥当性を高めたり共通理解を深めたりできるようにしました。



\* I C F (International Classification of Functioning, Disability and Health)

I C Fとは、2001年にWHOで採択された「国際生活機能分類」の略です。「障害」を病気やけがなどによる狭い意味で捉えるのではなく、「環境」と「個人」との相互作用や、その人を取り巻く生活全体から捉える考え方で

さらにC（授業評価）→A（改善）では、D（授業実践）後の評価・改善を受けて、再度授業研究（改善授業）を実施するようにしました。R→P→D（授業実践）→C→A→D（改善授業）→R（実態把握・課題把握の洗い直し）→P→D→C→A…とよりよい授業を目指して循環していく授業づくり・授業改善を行いました。

### 3 効果的な事後研修

事後研修は、限られた時間で経験等が異なる多数の教職員が、積極的に意見を出し合うことができるように実践しました。

- ・研修テーマや授業目標に基づく論点の設定や、事例児童生徒を設定することにより、視点を絞り、児童生徒の実態に沿った授業改善について話し合った。
- ・グループワークは、経験や年齢など、話合いの論点と意図を踏まえたメンバー構成に配慮した。
- ・少人数のグループワーク後に、全体でグループの話合いの内容を発表することで成果の共有化を図った。
- ・グループワークを深めるための、ファシリテーターの技量を高める研修会を実施し、ファシリテーターを担える教職員を養成した。
- ・付箋を用いたグループワークを行った。ワークシートのレイアウトや付箋の色等を工夫することで、成果や課題等を可視化し、効率的な進行と共通理解を促進した。

**【授業改善シート】**

本時の目標							
児童の「分かる」「考える」姿							
	活動設定の工夫		環境設定・教材教具の工夫			教師の働きかけ	
良かったあらわれ	付箋	付箋	付箋	付箋	付箋	付箋	付箋
良かった支援	付箋		付箋			付箋	
改善したいあらわれ			付箋	付箋		付箋	付箋
改善策	付箋		付箋	付箋	付箋	付箋	

**【授業改善のためのICF関連図】**

### 4 助言者等の意見を生かした授業づくり、授業改善

校内外の教育関係者や福祉分野等の人材を助言者として、広い視野からの意見を取り入れました。

- ・12年間のつながりを意識するために、校内の他学部から内部助言者を招く。
- ・他校の実践からの視点を参考にするために、他の特別支援学校から助言者を招く。
- ・地域や卒業後の生活の視点を取り入れるため、教育関係者以外の助言者を招く。

## 成 果

#### ○ 研修テーマ設定と目指す授業像の共通理解の深化

児童生徒の願う姿や目指す授業像を、全教職員が具体的にイメージできるまで話し合うことで共通理解が深まり、P D C Aサイクルが効果的に機能する下地になりました。

## ○ P D C Aサイクルが効果的に機能

P D C Aサイクルに、Rを取り入れ、実態把握をより充実させたことで、実態に基づいた計画と授業実践へのつながりがより明確になりました。「改善授業」を取り入れたことで、評価から改善点が明らかになり、「改善授業」での児童生徒の表れや再評価を、次の実態把握や計画に生かしていくことができました。

R-P D C Aサイクルが効果的に機能していくことで、授業や児童生徒の表れが改善されていくことが教職員間で実感でき、常によりよい授業を目指してR-P D C Aサイクルを循環させていくことが意識化されました。

## ○ 効果的な事後研修の工夫を日常の実践へ

付箋を使った少人数でのグループワークは、全教職員が自分の意見を発言するという活動の場があり、研修への参加意識や意欲が高まりました。それは日々の実践の中でも、積極的に意見を言う姿勢や意見を言いやすい雰囲気づくりにもつながりました。

またファシリテーター研修を通して、ファシリテーターの技量を持った教職員が多数存在することは、効果的な事後研修が実現することにとどまらず、日常の授業実践でも短時間で効率的に話し合いを行っていくことができ、T Tが効果的に機能する授業が、より活発に行われるようになりました。

## ○ 助言者からの意見を生かした授業づくり、授業改善

校内外の教育関係者からの助言により、学校生活 12 年間のつながりが深まり、さらに福祉関係者からの助言で、地域生活や卒業後の生活、社会参加や自立の視点で付けたい力を考えることができ、授業実践に生かすことができました。

校内の教職員が、他学部や他グループの授業を参観したり事後研修に参加したりする体制を作ることで、情報交換が密になり、共通理解を深化させることができました。

このように広い視野にたった助言や意見交換を授業実践に反映させることで、R-P D C Aサイクルの効果を増すことができました。

### 先生の声

幅広い実態の児童生徒、多数の教職員が在籍する本校のような学校の研修には、R-P D C Aサイクルや事後研修のワークシート活用など、研修方法の工夫やツールの活用が必要です。それらが有効に機能することで、経験の幅も広く多数の教職員がいることが、広い視点や豊富なアイデアと実践力というメリットに代わります。  
(50代男性教諭)

### ここがポイント！

## ◎ よりよい授業をつくっていく研修の日常化が図られている

A特別支援学校では、研修テーマや目指す授業像の具体化、P D C Aサイクルの効果的な活用のための工夫、グループワークの持ち方の工夫、広い視野を持つための助言者の選定など、校内研修の工夫を積極的に行ってきました。

P D C Aサイクルが効果的に機能し、授業や児童生徒の表れがよりよいものへ変化していくという実感や手応えは、研究授業だけに限らず、日頃の全ての授業において、よりよい授業をつくっていくという学校全体の共通理解と意識の高まりにつながっています。



# メンターチームを効果的に機能させOJTに取り組むG中学校

## 背景

G中学校は、27学級の大規模校です。管理職も含めて教職員数は47人です。年齢構成は、30代後半から40代の中堅と呼ばれる教員が少なく、40代後半以上のベテラン教員と教員経験年数10年未満の若手教員が占める割合が高くなっています。さらに毎年のように新規採用者が入ってきて、若手教員の育成がこれまで以上に重要な課題となっています。

そんな中、一部の若手教員が他の教員や保護者とコミュニケーションを図ることに苦手意識を持っているため、授業や生徒指導面での悩みをなかなか相談できていないことが分かりました。また、管理職は若手にもっと力を付けてほしいという強い願いを持っていました。そこで、管理職と相談の上、若手と中堅、ベテランが共に学び合えるメンターチームを立ち上げ、その活動を機能させれば、校内でのコミュニケーションが促進され、OJTを通じて若手の困り感が解決し、学校が活性化すると考えました。

## 実践

### 1 メンターチームの立ち上げ

#### メンターチーム指導者

メンターチーム全体をまとめ、必要に応じてメンターチームリーダーの相談に乗ったり、メンターとの橋渡し役になったりする。

#### メンターチームリーダー

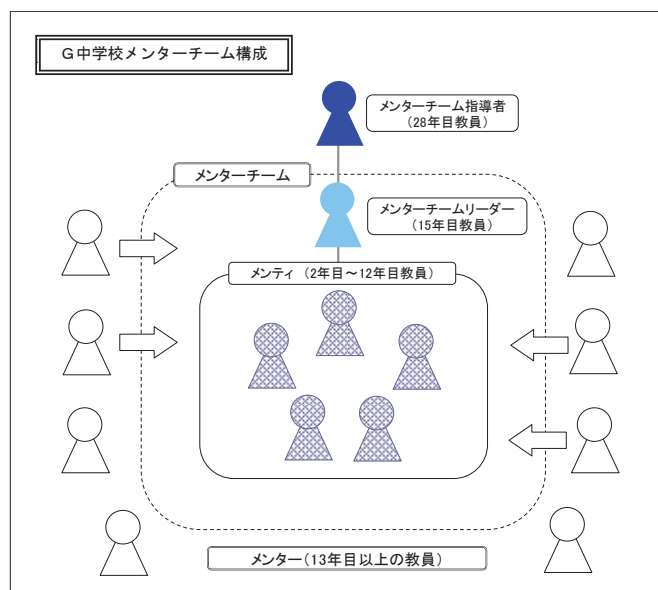
メンターチームの活動を中心となって進める。メンティにとって必要感のあるテーマ・課題について活動を企画したりメンターと日程の調整をしたりする。

#### メンティ

2年目から12年目までの教員

#### メンター（13年目以上の教員）

メンティ以外の教職員。誰でも自由にメンターチームの活動に参加できる。研修内容に応じて、メンターチーム指導者やメンターチームリーダーから参加の要請がある。



### 2 「誰でも」「楽しく」をモットーに

1回目の活動の前に、朝の打合せで、メンターチームリーダーから職員全体へ、メンターチームの趣旨を説明し、協力を呼び掛けました。メンターチームの活動は、「誰でも」参加できること、「楽しく」活動することを共通理解しました。

1回目の活動では、職員全体が活動の趣旨を理解しており、少人数でのフリートークという形式で実施したため、普段言えなかった悩みを自由に出し合うことができました。

### 3 「必要感のある活動内容」を取り上げた年間計画作成

メンターがメンティに身に付けてほしいことではなく、メンティ自身が困っていること、学びたいことを柱に年間計画を立てました。メンティは、「女子の指導方法」「生徒や保護者との対応」「合唱の指導方法」「学級経営」等について悩みを持っていました。また、このような悩みを先輩方と気軽に話をしたり、教えてもらったりしたいという思いを持っていました。そこで、各回に活動の内容と形態を工夫し、メンティの思いに沿った年間計画になりました。

#### 【メンターチーム年間計画と参加人数】

回	月	形態	内容	参加人数	
				メンター	メンティ
1	6	フリートーク	メンターチームの活動ガイダンス メンティからの要望	3	7
2	8	グループ討論	生徒・保護者への話し方、対応の仕方	8	16
3	8	フリートーク	体育大会に向けてのアドバイス ～カレーを食べながら語ろう～	6	17
4	10	勉強会 研修会	知っておきたい勤務制度(講師:事務職員) 合唱指導法について	8	13
5	12	勉強会	相談機関との連携について	3	12
6	1	ミニ教育実習	朝の会・帰りの会の指導について	3	5
7	2	ワークシート	振り返りと感想	13	22
8	2	ロールプレイ	電話対応について	6	8

### 4 メンターチームのよさ

#### (1) 課題にすばやく対応できる柔軟性

8月上旬に開催された全教員参加の「いじめに関する研修」では、具体的な対応の手だてまで話し合いを深めることができませんでした。生徒・保護者対応に難しさを感じていたメンティからは、更に研修を深めたいという声上がり、年度当初に計画されていなかったメンターチームとしての活動(第2回)を新たに実施しました。臨時の活動にもかかわらず、24人(メンター8人、メンティ16人)が参加しました。この活動では、経験年数が違う教員でグループを構成したことにより、事後にメンティからは、「自分の考えを再確認したり、自分にはなかった視点に気付いたりすることができました。」「問題を一人で抱え込まず、教員間でコミュニケーションや情報交換を密に図って対応していくことが大切であることを学びました。」といった感想がありました。

課題に対して素早く対応したり、話し合いの形態を臨機応変に変えられたりするのは、メンターチームならではのメリットです。



#### (2) メンターチームの利用(メンターとして)

第4回の活動は、勤務サービスについてでした。若手教員ばかりでなくベテラン教員の中にも勤務サービスをはじめ、会計処理等について苦手としている人がたくさんいました。この活動には、事務職員がメンターとして進んで講師役を務めてくれました。事務職員は職員会議や打合せ等でも話す機会があります

が、教員の研修のためにじっくりと伝えるチャンスはなかなかありませんでした。メンターとメンティのニーズがぴったりと合ったメンターチームの活動でした。

## 成 果

### ○ 若手教員にとっての成果

- ・若手教員の悩みを基に活動計画を立てたので、先輩教員の優れた考え方や技術を次の日から実践に生かす若手教員の姿が多く見られるようになりました。
- ・研修形態の工夫により、若手教員が先輩教員と積極的に関わり、自己課題を解決しようとする姿が見られるようになりました。さらに、回数を重ねるごとに日常的に他の教員へ主体的に関わりながら学ぶ若手教員が増えました。
- ・若手教員と先輩教員とが、よりよい人間関係を築くことができました。

### ○ 中堅やベテラン教員にとっての成果

- ・若手教員を育てるという使命感や責任感の高まりが感じられました。
- ・若手教員に積極的に関わる中で、よいアドバイスをしようと考え、教科や生徒指導等の文献や資料を手に取り、自らをより高めようとする姿が見られました。

## 先生方の声

○メンターチームの活動でのグループ学習を通して、先輩教員から経験を踏まえた実践的な指導法や対処法を学ぶことができ、このような機会があったことに感謝しています。  
(20代女性教諭)

○先輩方とざっくばらんに会話する機会をつくっていただいたことが一番のメリットではないかと思います。ベテランの先生方とメンターチームの活動のとき以外にも、もっと関わるべきだと思いました。  
(30代男性教諭)

○自分自身が初心に戻って学ばせてもらうことができました。それと同時に、中堅の立場なので、何かアドバイスできるよう知識と技術を身に付けていかなければいけないと、気持ちが引き締まりました。  
(40代女性教諭)

## ここがポイント！

### ◎ メンターチームの必要性を教職員全員が共通理解している

組織として若手教員を育成する必要感が共有されることにより、教職員一人一人のメンターチームにおける役割が明確に理解されました。若手教員にとっては、誰にでも教えてもらえる安心感の中で業務を行うことができます。

### ◎ 若手教員の「知りたい」「学びたい」内容で計画を立てている

若手教員のニーズから活動計画を立てているので、学習したことが、すぐに教科指導や学級経営、生徒指導に生かされています。

### ◎ ミドルリーダーの育成が図られている

若手教員とベテラン教員をつないだり、活動に必要な情報を整理・発信したりすることにより、ミドルリーダーのマネジメント力の育成が図られています。

## 2 教育課程から考える

教育課程を見直し、改善を図っていくことも、授業づくりを支える学校体制の一つです。見直し、改善を図っていく場合、自校の教育活動を子どもの姿から適切に評価し、それを確実に改善方策につなげるといったPDCAサイクルを確立しましょう。

適切に評価するためには、子どもの姿を全国学力・学習状況調査や学校評価（子ども・保護者・教職員・地域等）等、多様な資料やデータを用いて客観的に検証することが大切です。

全国学力・学習状況調査は、知識・技能だけでなく、思考力・判断力・表現力等の資質や能力、学ぶ意欲や学習習慣などについても客観的な数値データを得ることができます。

こうしたデータに基づいて教育課程を見直すに当たっては、明らかになった成果や課題を焦点化し、教育活動の重点化を図ることが大切です。

その他にも、地域・家庭、外部人材等の「横の連携」から子どもへの学習支援を手厚くしたり、保・幼、小、中、高の「縦の接続」から発達の段階を踏まえて教育活動を精選し、系統化を図ったりすることが考えられます。

全国学力・学習状況調査結果を活用して、学力向上に向けて学校体制で取り組んだM小学校の実践を紹介します。



# 「学力向上」を目指すM小学校

## 背景

M小学校では、「一人一人の子どもが、学ぶ喜びを実感する授業～確かな学力を育む授業の創造～」を研修テーマに掲げ、子ども理解と教材研究を大切にしながら授業づくりを進めています。年2回行っている学校評価アンケートでは、「授業が分かる」「先生は分かりやすく授業を行っている」と答える子どもや保護者の割合は、毎年85%を越えています。一方、全国学力・学習状況調査では、ここ数年国語に課題が見られます。M小学校は、子どもたちの学ぶ意欲を大切にしながら、学習内容の確実な定着を図るために、以下の二つを重点とし、全校体制で学力向上に取り組むことにしました。

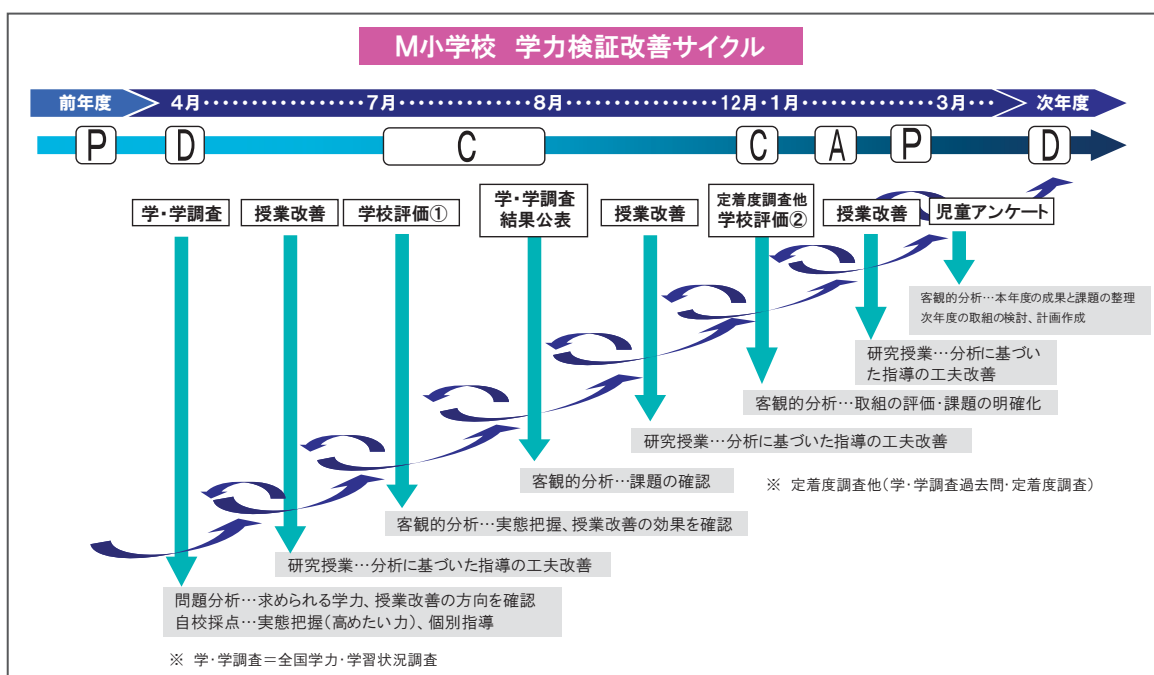
- ・PDCAサイクルを機能させた学力向上対策
- ・家庭や地域との連携

## 実践

### 1 PDCAサイクルを機能させた学力向上対策

#### (1) 学力検証改善サイクルの確立

全国学力・学習状況調査から、M小学校の子どもたちの実態として、目的や意図が伝わるように説明することに課題が見られたことから、「説明に必要な情報を資料から読み取ること」と「目的や意図に応じた条件に合わせ、具体的に自分の考えを書くこと」に重点をおいた指導が必要であると考えました。進学先であるM中学校においても同様の傾向が見られたことから、M中学校区（M小学校・M中学校）で、子どもたちに特に育みたい力（高めたい力）を「読み取る力」と「書く力」とし、小中学校の全職員で共有するとともに、それぞれの学校が全国学力・学習状況調査やその過去問、定着度調査、学校評価等を活用した学力検証改善サイクルを確立し、組織的・計画的に課題の改善に取り組みました。



## (2) 改善プランシートの活用

M小学校では、各学年で改善プランシートを作成し、年間のPDCAサイクルの中で、高めたい力の着実な育成を目指しました。改善プランシートの活用については、まず、前年度までの子どもの実態と全国学力・学習状況調査の自校採点結果から、子どもの実態（課題）を整理するとともに、その解決策を明記します。そして、解決策に沿って校内研修や日々の授業実践を積み重ね、7月と12月に取組を評価し、新たな改善策を講じていきます。この取組は、M中学校でも行われています。

### 【M小学校 第5学年 改善プランシートの一部】

高めたい力	状況・課題（4月）	具体的な解決策（4月）	改善策（7月・12月）
読み取る力	・資料から必要な情報を読み取るスキルが十分に付いておらず、読み取りに時間がかかる。	・文章や資料から情報を読み取る活動を意図的に取り入れる。（特に、国語、社会、算数では意識して取り入れる。） ・理由を明確にして書く活動、説明する活動を取り入れる。	・複数の資料を関連付けて読む、比較して読むなど、目的を明確にして活動に取り組ませる。 ・家庭学習の内容に資料の読み取りを取り入れる。

評価については、学校評価に高めたい力に関する項目を取り入れ、それらについての児童と教師の評価結果を分析し、取組の成果と課題を整理しています。

### 【評価項目及び経年結果記録の一部】

M小学校 第5学年 【書く力】	学年(年度)	第3学年(H24)		第4学年(H25)		第5学年(H26)		第6学年(H27)	
	月	7	12	7	12	7	12	7	12
理由を入れて、自分の考えをまとめることができる。	児童	22.1	22.4	21.3	24.5	20.1	25.1		
	教師	25.8	28.3	26.4	28.4	26.6	30.3		

M中学校 第2学年 【書く力】	学年(年度)	小学校第6学年(H24)		第1学年(H25)		第2学年(H26)		第3学年(H27)	
	月	7	12	7	12	7	12	7	12
教科書、資料等から根拠を見つけ、自分の考えに反映してまとめることができる。	生徒	21.3	26.1	19.3	22.1	21.8	24.5		
	教師	24.5	26.4	19.8	23.4	20.1	24.5		

※数値はA評価の割合(A…できる B…どちらかといえはできる C…どちらかといえはできない D…できない)

## 2 家庭や地域との連携

### (1) 家庭学習の充実に向けて

M中学校区では、家庭学習の習慣化と充実を図るとともに、小中9年間の子どもの育ちを見通し、学校と家庭が連携して学習を進めることができるように、家庭学習の手引き「M中学校区 学びのすすめ」を作成し、各家庭に配布しています。この家庭学習の手引きは、発達の段階を考慮しながら「目標時間」「学習の準備」「学習内容」「学習後の準備」を視点として作成しました。

また、中学校区共通の宿題として「視写」を行っています。小学校では、主に国語の教材文、中学校では、新聞の論説等をノートに書き写します。丁寧に、正しく書き写すことや時間内でより多くの文字を書き写すこと、様々な表現に触れることを目標に行っています。

家庭学習の取組については、担任が、月末に一か月の取組状況を把握し、学年便り

M中学校区 【5・6年生】 4月～7月

『学びのすすめ』

◆家庭学習の内容 ◆目標時間 ◆めあて

◇宿題+視写  
◇自主学習  
◇翌日の準備

60分  
10分×学年

step1 学習の準備

1 テレビを消す。 2机の上を整頓する。

step2 学習内容

1 宿題をする。(+視写10分)  
2 自主学習をする。  
○漢字の丸、針通し(答え合わせもなし)  
○日記を書く。  
○意味調べや短文作成をする。  
○授業をする。(授業カードに記録する。)  
○テストやプリントで間違えた問題をやり直す。

step3 学習後の準備

1 家の人に見てもらう。一ずつランドセル  
2 翌日の準備をする。

◇自己評価 ①よくできた! ②まあまあ! ③もう少し!

4月	5月	6月	7月
----	----	----	----

◇家の人から

◇先生から

を通して、子どもたちや家庭に取組のよさや改善等を伝えるようにしています。また、個々の取組の状況から、宿題の内容や出し方について改善を図るよう努めています。

## (2) 地域・保護者ボランティアの活用

M小学校では、基礎学力の定着を目指し、朝学習と放課後学習を行っています。朝学習では、漢字テスト（木曜日）と計算テスト（金曜日）を実施しています。採点は、テスト後に学習ボランティア（通称「丸付け隊」）が行い、その日のうちに子どもに返すようにしています。間違っていた問題については、その日の家庭学習で復習することになっています。また、読書の質を高めるために、月に2回朝活動の時間を使って、司書教諭と図書ボランティアが連携し、ブックトークを行っています。紹介する本は、「M小読書100選」から、発達の段階や学習内容を考慮し、選定しています。

放課後学習は、週2回行っています。内容は、補充的な学習と発展的な学習を扱い、補充的な学習は主に教科書の問題、発展的な学習は担任が作成した問題を扱っています。個々の児童への指導については、学習ボランティアを募り、教職員（1～2名）とともに行います。



## 3 その他の取組

### (1) よりよい人間関係づくり

一人一人の子どもが学ぶ喜びを実感できるようにするためには、教科指導の充実とともに、子ども同士のよりよい人間関係づくりも欠かせません。M小学校では、4月、5月、9月の第1週、第2週に、人間関係づくりプログラムを活用した授業を行っています。

また、毎月第2水曜日の朝活動の時間をM小ニコニコタイムとし、人間関係づくりプログラムに紹介されている「心ほぐし」やエンカウンターの手法を用いたエクササイズなどを行っています。日々の授業においても、教育効果を上げるために子ども同士が関わる場を設定しています。「学校が楽しい」「友達と会うことが楽しい」と感じられる子どもをこれまで以上に増やし、よりよい授業づくりを進めていこうと、全教職員が共通意識を持って取り組んでいます。

エクササイズ	
<b>鏡に変身!</b>	
<small>(時間) 15分 (場所) オープンスペース (対象) 小学低級～高年生</small>	
ねらい	お互いによく見たり、見られたりする体験を通して、楽しみながら自己表現できる雰囲気をつくる。 <span style="float: right;">自己受容</span>
展開例	1 二人組になる。 2 一人の動きを、もう一人が鏡役になってまねをする。 →一つのグループ、または教師が例を示す。 ・1分たったら交代する。 3 4人組になる。 4 音楽に合わせて1人が動き、他の3人がまねをする。順番に全員のみねをする。 ・音楽をかける。 ・30秒たったら交代する。 5 感想を伝え合い、握手又は、ハイタッチをする。

### (2) 学校裁量時間の活用

第2金曜日の5時限を学校裁量時間とし、授業で習得した基礎的・基本的な知識・技能を活用して、考える楽しさを感じられるような課題等に取り組んでいます。

- 例
- ・習った漢字を使った四字熟語や故事成語調べ
  - ・リレー作文（テーマを設定し、使う接続後、文末表現を指定して行う。）
  - ・短い文章の推敲（よいモデルと悪いモデルを示して比べる。）
  - ・新聞記事やニュースを話題とした討論（興味を引くのはどちらかな。）
  - ・身の回りにある様々な図形の求積（校内の広い部屋ランキングをつくろう。）

### (3) 研修時間の確保

M小学校では、「授業を真ん中に据えた学校・授業づくり」を学校経営の柱としています。その実現のために日課表の中に、教材研究の時間を位置付けました。

火、木、金曜日の放課後を「学年研修」「教材研究」「子ども理解」の時間とし、金曜日の午後4時から、「教員の学びタイム」と称し、教職員同士が授業について語り合う時間としています。

### (4) 学習コーディネーターの位置付け

日々の授業改善やより円滑な家庭、地域との連携を図るために、校務分掌に学習コーディネーターを位置付けています。学習コーディネーターは、学級を受け持たず、各学年の研修に参加したり、日常的に各学級の授業を参観したりして、研修主任に授業改善の進捗状況等を報告します。また、各学年の学習内容や子どもの学習状況に応じて、学習ボランティアに協力を要請するなど、各学年と学習ボランティアをつなげていく役割も担っています。

### 先生方の声

- 高めたい力を二つに絞っているので授業改善に取り組みやすいし、子どもの変容も捉えやすいと感じています。(20代女性教諭)
- 研修主任として、先生方の授業をたくさん参観したいと思っていますが、担任をしているので、その時間をつくるのが難しいです。でも、学習コーディネーターが日常的に各学級の授業を参観し、授業改善の成果と課題を報告してくれるので、実態に即した提案ができるようになりました。(30代男性教諭)
- 教材研究をしたり、授業について語り合ったりするための時間が確保されているので、授業についてこれまでよりもじっくりと考えることができるようになりました。また、先輩にも相談しやすくなりました。(20代男性教諭)

### ここがポイント!

#### ◎ PDCAサイクルを機能させている

- ・全国学力・学習状況調査結果から、課題を整理し、高めたい力を「読み取る力」「書く力」に焦点化し、学力検証改善サイクルや改善プランシートを活用することにより、PDCAサイクルを機能させて課題解決に取り組んでいます。
- ・高めたい力を焦点化したことで、全ての教科で「読み取る力」「書く力」を意識した教材研究が行われ、教職員同士が互いの授業を参観するときも、共通の視点から授業について語り合うことができるようにしています。

#### ◎ 「縦の接続」「横の連携」を大切にしている

- ・中学校区で、共通課題を設定し、9年間を見通した授業改善、家庭学習の充実に取り組んでいます。
- ・地域の人材や保護者の理解と協力を得て、子どもたち一人一人に力を付けていくための取組が進められています。



## IV 資料

### 1 各種調査から見る国及び静岡県の学力・学習に関する現状

#### (1) OECD生徒の学習到達度調査 (PISA 2012)

- ・「数学的リテラシー」「読解力」「科学的リテラシー」の3分野ともに、比較可能な調査以降、平均得点が最も高くなっています。
  - ・数学に対する興味・関心を持つ生徒や数学の有用性を感じる生徒の割合は、2003年に比べると増加していますが、諸外国の平均に比べ低くなっています。
- ※ 2012年調査では、数学的リテラシーを中心分野として、読解力、科学的リテラシーの3分野を調査。また、国際オプションとして、コンピュータ使用型調査（デジタル数学的リテラシー、デジタル読解力、問題解決能力）も実施。

#### (2) IEA国際数学・理科教育動向調査 (TIMSS 2011)

- ・小学校（4年生）は、各教科ともに前回調査（2007年）に比べ、平均得点が上昇するとともに、習熟度の低い児童の割合が減少し、習熟度の高い児童の割合が増加しています。
- ・中学校（2年生）は、各教科とも平均得点は前回調査と同程度ですが、習熟度の高い生徒の割合が増加しています。
- ・「勉強が楽しい」と回答した小学生、中学生の割合は、前回調査と比べ増加しており、特に、小学生の理科は前回調査に続き、国際平均を上回っています。一方、中学生は数学、理科ともに前回調査に続き、国際平均よりも低くなっています。

#### (3) 平成26年度全国学力・学習状況調査

##### ア 見通しと振り返り

「学習の見通しを持たせる活動」「学習内容を振り返る活動」に関する教師と児童生徒の意識に大きな差が見られます。児童生徒自らが実感できるように、教科や学年に限らず、継続的にこれらの活動を行っていきましょう。

質問事項	回答	小学校	中学校
普通の授業では、はじめに授業の目標（めあて・ねらい）が示されていると思いますか	学校	92.4	93.2
	児童・生徒	79.5	71.4
普通の授業では、最後に学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか	学校	91.5	87.4
	児童・生徒	73.3	57.9

##### イ 仲間との関わりを通して学びを深める

一人では気付かなかった新しい視点に気付いたり、質問に対して根拠を明らかにしたり、筋道立てて説明したりするなど、子ども同士の関わり合いを通して豊かな学びが展開されるよう心掛けていきましょう。

青…全国よりも高い 赤…全国よりも低い（%）

質問事項	[上段: 学校質問紙 下段: 児童生徒質問紙]	回答	小学校	中学校
児童〔生徒〕は、学級やグループでの話し合いなどの活動で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか	静岡県		66.5	62.4
	全国		63.8	63.8
学級の友達〔生徒〕との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思いますか	静岡県		66.4	68.1
	全国		65.9	61.9

## ウ 一人一人のよさを認める

本県がこれまで大切にしてきた、子どものよさや可能性を認め、伸ばす教育が継承されています。これからも、より具体的に、積極的に子どもたちに声を掛けていきましょう。

青…全国よりも高い (%)

質問事項 [上段:学校質問紙 下段:児童生徒質問紙]	回答	小学校	中学校
学校生活の中で、児童〔生徒〕一人一人のよい点や可能性を見付け、生徒に伝えるなど積極的に評価している	静岡県	98.0	96.9
	全国	96.9	96.5
先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う	静岡県	82.5	76.8
	全国	79.7	74.1

## 2 静岡県教育振興基本計画「『有徳の人』づくりアクションプラン」第2期計画

### (1) 静岡県の教育の目標

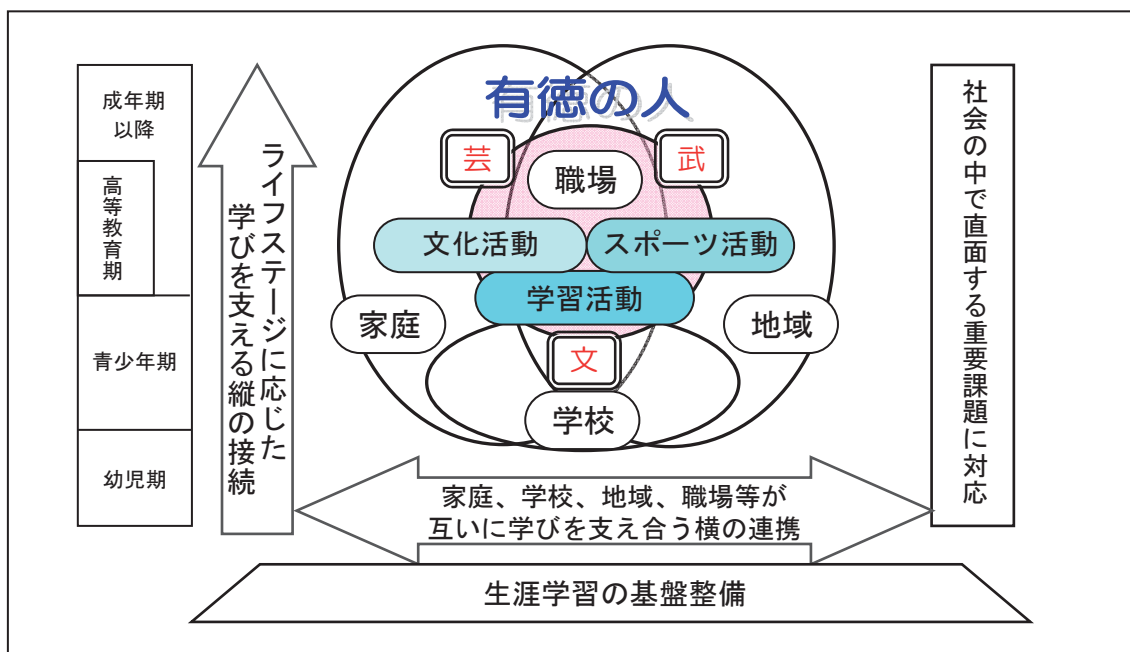
静岡県・静岡県教育委員会では、静岡県教育振興基本計画「『有徳の人』づくりアクションプラン」第2期計画に基づき、ライフステージに応じて、家庭・学校・地域等、社会総がかりで「『有徳の人』の育成」を進めています。

－「有徳の人」－

- ① 自らの資質・能力を伸張し、個人として自立した人
- ② 多様な生き方や価値観を認め、人との関わり合いを大切にする人
- ③ 社会の一員として、よりよい社会づくりに参画し、行動する人

### (2) 基本的な考え方

「『有徳の人』の育成」を進めていくために、生涯学習の考え方の下、子どもから大人まで、人生のそれぞれの段階に応じた学びの場の充実を図る「縦の接続」と家庭や学校、地域、職場等の「横の連携」を大切にします。



### 3 『よりよい自分をつくっていくためにⅢ』

#### (1) 子どもの学びを支える教師の役割

「学びの実感」を積み重ねることを通して、どの子どもにも「確かな学力」を育むために、教師は教材研究と子ども理解を基盤に、「学びの見通しを持ち、意図的に働き掛けること」「子どもを丁寧に見取り、指導に生かす評価を行うこと」を繰り返し行う必要があります。

ア 学びの見通しを持ち、意図的に働き掛ける

(ア) 付きたい力に沿って意図的に働き掛ける

(イ) 学びの過程を客観的に捉えられる手だてを講じる

- ・理由を付けて認める
- ・子ども同士で学び合う場を設定する
- ・学びの足跡を蓄積する
- ・学びの振り返りを工夫する

(ウ) 個に応じた指導を行う（支援）

イ 子どもを丁寧に見取り、指導に生かす評価を行う

(ア) よさや可能性を見取る

(イ) 付きたい力に照らして表れを見取る

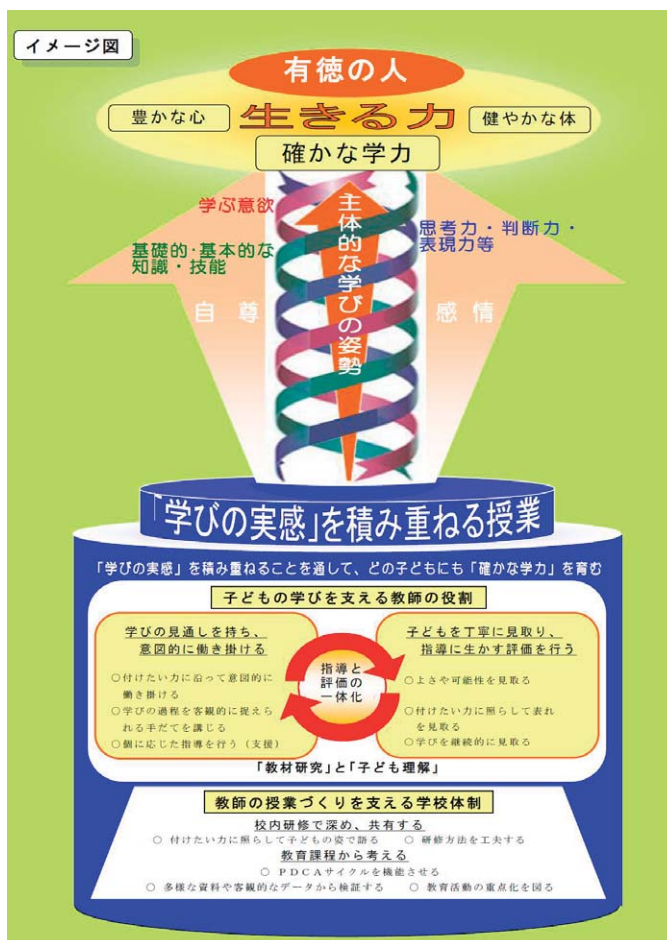
(ウ) 学びを継続的に見取る

#### (2) 教師の授業づくりを支える学校体制

「学びの実感」を積み重ねることを通して、どの子どもにも「確かな学力」を育むためには、教師一人一人が授業力の向上を図るだけではなく、学校として教師の授業づくりを支える体制をつくる必要があります。

ア 校内研修で深め、共有する

イ 教育課程から考える



## よりよい自分をつくっていくためにⅣ

発行 平成 27 年 3 月

発行者 静岡県教育委員会 義務教育課  
〒420-8601 静岡市葵区追手町 9 番 6 号  
電話番号 054-221-3141



Shizuoka Prefecture